シカゴ学派社会学とその時代
——1920年代アメリカの社会状況——

高山 龍太郎

1 はじめに

「どのような社会状況が，どのように人びとの態度や行動を規定するのか」という問いは，きわめて社会学的なものである。社会学の研究活動を「研究者という人びとの営み」としてとらえるとき，同様に，その研究成果を，それが書かれた社会状況と関連させて考察することは，重要な社会学的課題である。研究活動を規定する社会的要因を明らかにして初めて，その成果を十全に理解することができよう。

1892年，アメリカのシカゴ大学に，社会学の専門教育を行う大学院が世界で初めて誕生する。このシカゴ大学で展開された社会学は，後に，シカゴ学派社会学（the Chicago School of Sociology）と呼ばれ，20世紀最初の35年間，アメリカ社会学界を支配し，その後も多大な影響を及ぼしてきた。とりわけ，1920年代は，シカゴ学派の「黄金時代」と呼ばれ，急速に拡大していた大都市シカゴで生起するさまざまな社会問題を対象に，豊富で多様な経験的調査が展開された。そして，近年，こうしたシカゴ学派の諸成果は，社会学の一つの大きな遺産として，脚光を浴びている（Plummer 1997; 宝月・中野 1997など)。

シカゴ学派の活躍した1920年代のアメリカは，第一次世界大戦後の経済的繁栄のなかにあった。工業生産は，1922年から29年までに，およそ2倍に伸び，自動車・冷蔵庫・洗濯機などの耐久消費財が，一気に普及する。余暇を手に入れた人びとは，映画，スポーツ，音楽などに娯楽を求め，大衆文化が花開く。1920年に始まったラジオ放送が伝える大量の情報は，人びとの欲望を駆り立てる。禁欲と倹約

を尊ぶピューリタンの伝統に代わって，消費と享楽が新しい価値となった。1920年，婦人参政権を規定する憲法の修正が行われ，ミニスカートとショートヘアに真っ赤な口紅をつけたフラッパーと呼ばれる女性たちが，通りを闊歩するようになる。

しかし，繁栄の光は，大きな陰も生みだした。1920年代初頭には，賃上げや労働条件の改善のみならず産業の国営化を求める労働者たちのストライキが頻発した。ロシア革命がアメリカに上陸するのではないかという大衆の不安は，パーマー（Alexander M. Palmer）司法長官の「赤狩り」を支持する。社会を覆い始めた人種的な不寛容が，移民制限とクー・クラックス・クラン（Ku Klux Klan）を生みだし，無実のイタリア系移民サッコ（Nicola Sacco）とヴァンゼッティ（Bartolomeo Vanzetti）を死刑に追い込んだ。1920年から33年まで続いた禁酒法は，酒類の密造と密売を手がけた犯罪組織に莫大な資金をもたらし，カポネ（Alphonso Capone）の支配するシカゴは，縄張争いの敵対者を殺傷する機関銃や爆弾によって血塗られることになる。

こうした事柄は，当時のシカゴ学派の人びとにとっては，当たり前のことであったかもしれない。だが，現在のわれわれには，自明でないことも多い。今日の常識を無自覚に前提して現在の視点から過去の業績を評価すれば，的外れなものになりかねない。また，残されたシカゴ学派の諸作品を，それが書かれた当時の人びとと同じ視線に立って読むことは，これまで気が付かなかった新しい発見につながっていくだろう。本稿では，シカゴ学派社会学の諸成果を素描し，1920年代を中心にアメリカの社会状況との関連性を考えていきたい。

2　シカゴ学派社会学の諸成果

シカゴ学派という呼称は，一枚岩的な研究活動を想起させるが，実態は，必ずしもそうではない。その理論と方法および研究領域は，きわめて多岐にわたっている（Bulmer 1984)。シカゴ学派の名称は，いわゆるシカゴ学派の黄金時

代が過ぎ去り，他大学の社会学が台頭してきた時期に，アメリカ社会学史を振り返る過程において，シカゴの人びと自身ではなく，他大学出身者によって外部から付与されたものである（Cavan 1983: 408)。また，シカゴ学派の諸特徴とされるものには，神話にすぎないものも多いと言われる（Harvey 1987)。（中野 2001a)

このように，シカゴ学派の研究領域の分類には，議論の残るところではある。しかし，本稿では，特に，「都市」「民族」「逸脱」という3つの研究領域を取り上げたい。というのも，上記3領域が，経験的な実証研究が数多く行われた分野として，当時の社会状況との関連が，とりわけ際立っていると思われるからである。以下，この3領域について，シカゴ学派の研究成果を概観する。

2.1 都市

シカゴ学派は，初代社会学部長のスモール（Albion W. Small）の時代から1920年代のパーク（Robert E. Park）とバージェス（Ernest W. Burgess）の時代に至るまで，「社会的実験室としての都市」(Park 1929）という標語のもと，シカゴという近代的大都市の諸問題に対する旺盛な経験的調査を行った。これらの調査は，主に大学院生によって行われ，博士論文として大学に提出された[1]。こうしたモノグラフのうち優秀なものが，1920年代から1930年代にかけて，シカゴ大学出版局より「社会学叢書」[2]として相次いで出版され，いわゆる「黄金時代」を形づくった。

こうした調査の基本的枠組をまとめたものが，パークらによって編集された『都市』(Park et al [1925]1967）である。都市研究における人間生態学的視点を打ち出したこの本には，パークの記念碑的論文「都市――都市環境におけ

1　1935年までの博士論文・修士論文題目については，フェアリス（Faris 1967）を参照のこと。
2　社会学叢書には，下記のようなものがある。アンダーソン『ホボ』(1923)，マーゴールド『性の自由と社会統制』(1926)，マウラー『家族解体』(1927)，エドワーズ『革命の自然史』(1927)，キャバン『自殺』(1928)，ワース『ゲットー』(1928)，スラッシャー『ギャング』

る人間行動研究のための若干の提案」(Park 1915) の改訂版が収録されている。この論文のなかで，パークは，都市が多様な自然地帯 (natural area) から成る社会的世界のモザイクであるという認識を示し[3]，それぞれのモザイクのピースを調査する観点を簡潔にまとめた。さらに，都市に流入する人口を前提に5つの同心円から成る動態的な地域構造モデルを定式化したバージェスの「都市の成長——調査計画序論」(Burgess 1924) や，自然生態学の発想を人間社会に持ち込んだ典型的論文と言われるマッケンジーの「ヒューマン・コミュニティ研究への生態学的接近」(McKenzie 1924) も合わせて再録されている。この『都市』で示された都市研究の基本的指針として，(1)都市は，一つの生態学的システムとして，人為を越えたある種の法則に従って活動していること，(2)都市は，生態学的な過程により，特徴あるいくつかの自然地域に分かれること，(3)こうした自然地域には，それぞれ独特な生活と文化が展開されていること，(4)これらの都市の諸特徴は，時間の推移とともに常に変化すること，などが挙げられよう。

パークとバージェスらによって示された調査の枠組に沿って都市研究を行った典型例が，ゾーボーの『ゴールド・コーストとスラム』(Zorbaugh 1929) である。彼が調査を行ったニア・ノース・サイド (Near North Side) は，シカゴの中心業務地区ループ (Loop) からシカゴ川を挟んですぐ北側に位置し，バージェスの同心円モデルの推移地帯 (zone in transition) にあたる。ゾーボーは，さまざまな指標を用いた地図を作製し，モザイク状に広がる社会的世

(1928)，ヒラー『ストライキ』(1928)，バージェス『パーソナリティと社会集団』(1929)，ドノヴァン『セールス・レディ』(1929)，ゾーボー『ゴールド・コーストとスラム』(1929)，クレッシー『タクシー・ダンスホール』(1932)，ヤング『ロシア人街の巡礼者たち』(1932)，レックレス『シカゴの悪徳』(1933)，サザランド『プロの窃盗犯』(1937)，フレイジャー『アメリカにおける黒人家族』(1939)，フェアリスとダンハム『都会における精神障害』(1939)。(中野 2001b: 15)

3 「凝離 (segregation) の過程は，道徳的距離を確立する。この道徳的距離によって，都市は，触れ合いながらも浸透し合わない小さな世界のモザイクとなる」(Park [1925]1967: 40＝1972: 41)。

界を視覚化していく。金持ちの暮らすゴールド・コースト，独身者が多く流動性の高い貸部屋地域，芸術家など既成の価値観にとらわれない人びとのタワータウン，飲酒・売春・賭博などの悪徳がはびこる暗黒街，社会の表舞台から落後した人びとが吹き溜まるスラム，アメリカに渡ってきた移民たちが親類や友人を頼って住みつくさまざまな民族集団の街角。こうして空間的に確定された自然地域の，今度はその生活と文化を，聞き取りによる生活史や社会機関の資料などを用いて明らかにしていく。例えば，貸部屋地域住民の典型的事例として，音楽家になる夢を描いて片田舎からシカゴに来た20代前半の女性が，夢破れ，お金も知り合いもない匿名的世界を刹那的に生きている姿が，彼女の語った生活史によって例示される。また，ゾーボーは，都市の成長にともない，同一地区の住民が，「アイルランド人→ドイツ人→スウェーデン人→シチリア人→黒人」のように変遷していくという時間的な視点も忘れていない。

シカゴ学派による都市研究の要約とみなされるのが，ワースの論文「生活様式としてのアーバニズム」（Wirth 1938）である。この論文は，以後4半世紀にわたって都市社会学の分野で大きな影響を及ぼした。ワースは，都市を，人口の規模・密度・異質性の3点から定義する。これらの都市の3要素を独立変数として扱い，演繹的に，従属変数である都市的な生活様式（＝アーバニズム）を導き出す。彼によれば，都市の人口が大規模で高密度で異質であることが，一方で，社会的分化を進展させ，他方で，個人の疎遠な態度を促し，結果として，原子化した大衆と公的な社会的コントロールを現出させるという。すなわち，ワースの描く都市的生活様式とは，「第二次的接触が第一次的接触に取って代わり，親族の絆が弱体化し，家族の社会的意義が減少し，近所づきあいが消滅して，社会的連帯という伝統的基盤が削り取られていく」（Wirth 1938＝1978: 143）ものである。

2.2 民族

モザイク状の都市の諸地域を見回したとき，とりわけ目を引いたのが，シカゴに移民してきたさまざまな民族集団である。当時，シカゴの人口の7から8割は，移民の1世および2世であった。こうした民族集団のアメリカへの不適応の問題は，犯罪などの逸脱行動として具体的に現れていた。当時，民族間の差異は，遺伝など生得的な属性によって説明されていた。これに対して，シカゴ学派の貢献は，実証的なデータ収集によって，民族が社会的な構成物であることを明らかにした点にある。ポーランド人，ユダヤ人，黒人などが，具体的な調査対象として選ばれた。

シカゴ学派における民族関係の実証研究は，トマスとズナニエツキによる『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』（Thomas and Znaniecki [1918-20] 1927）に始まる。トマスは，ヨーロッパ留学中に，各国の文化的相違と，伝統的な農民社会の変容に関心をもつ。アメリカ帰国後，ハルハウスの設立者の遺産を相続したヘレン・カルバー（Helen Culver）より移民問題の研究費として5万ドルを受け取ったトマスは，複数の民族を比較する構想から，数の多かったポーランド移民に関心の焦点を絞る（Madge 1962）。

この『ポーランド農民』の前半では，「行動に関する現存する社会的規範が集団の個々の成員に対して与える影響の減少」（Thomas and Znaniecki [1918-20] 1927: 1128）と定義される社会解体（social disorganization）が描かれる。歴史的変動やアメリカへの移民が，連帯（solidarity）を特徴とする伝統的な社会の組織化を崩し，次第に農民たちが個人主義的な態度を帯びて，かつての第一次集団の影響から抜け出ていく様子が，移民たちの手紙を用いて例証される（高山 2001）。後半では，こうした社会解体に直面したポーランド農民たちの適応と不適応の様子が描かれる。病気や失業などの危機に備えて親類や近隣の相互扶助に代わる保険制度を作り出し，各都市のポーランド人コミュ

ニティを結びつける広域組織を形成する一方で，こうした新しい組織のもつ合理性や自己防衛性が，個人の道徳的退廃を抑止できない様子も示されている(藤澤 1997)。

『ポーランド農民』は，単一の民族集団についてのモノグラフであった。これに対して，複数の民族間の関係を考察したのが，パークである。パークは，シカゴ大学赴任前，穏健的な黒人改革者ワシントン（Booker T. Washington）の秘書として，アメリカ南部の黒人の実態をつぶさに見てきた。パークは，1913年の論文「第二次集団における人種的同化」（Park 1950）のなかで，「移民の同化」「アメリカにおける黒人と白人の葛藤」「新しい人種的集団意識の発現」など，民族集団研究の鍵となる重要なテーマを提出している。リプセット（Lipset 1950）によれば，パークの基本的な仮説は，「人種偏見は，諸集団や諸個人が，社会の組織化における変化に抵抗しようとするとき，生み出される。地位の変化は，利害の葛藤と人種的敵意を生み出す」というものである。「接触→競争→闘争→応化→同化」というパークの人種関係サイクルのモデルは，アメリカ到着後かなりの時間が経過しているにもかかわらず完全に同化していない民族集団が現実に多数存在するという調査結果とあいまって，数多くの議論を巻き起こした。しかし，パークのモデルは，ヴェーバー（Max Weber）の言う理念型として，多くの社会学者の関心を喚起し，調査の仮説を提供し，収集されたデータを解釈する枠組を与えた点で，評価されるべきであろう（Lyman 1990)。

『ポーランド農民』やパークに影響を受けた教え子たちが，民族集団に関するモノグラフを書き残している。ユダヤ人の出自を持つワースは，都市のユダヤ人居住区を描いた『ゲットー』（Wirth 1928）を著す。前半は，ヨーロッパにおけるゲットーが自発的形態から強制的形態へと変遷した歴史を，詳細な資料を用いて描いている。後半では，舞台をアメリカに移し，入植後のユダヤ人社会形成の過程や，ゲットーの生成と消滅の歴史，生活空間としてゲットーがはらむ諸問題などについて詳述している。最終章「ゲットーの社会学的意義」

で，ワースは，人種的偏見と社会解体から諸問題が蓄積する空間としてゲットーをとらえるのと同時に，固有の文化が生成される生活共同体としての側面も強調している。

パークの最良の学生と称されるフレイジアは，『シカゴの黒人家族』(Frazier 1932) の中で，黒人家族の解体と再組織化の過程を分析した。彼は，黒人家族の諸問題を生得的な属性によって説明する生物学的本質主義に反論し，奴隷制度の崩壊や北部都市の移住にともなって黒人を取り巻いていた伝統的な社会組織の崩壊にその原因を求めている。そして，解放された黒人家族の再統合に中心的役割を果たしたのが，教会や学校などの関心共有型のコミュニティ (community of interest) であった。フレイジアは，生活史などの質的な資料だけでなく，統計的なデータを用いて，シカゴの中心部から南に向かって黒人が帯状に集住していた黒人ベルト地帯の地域的な階層構造についても明らかにしている。(中野・西川 2002)

2.3 逸脱

「おそらく，1920年代のシカゴという都市のもっとも目立った評判の側面は，その犯罪の多さである。ビール戦争，爆弾，恐喝，強盗，ギャングの殺し合いは，世界中に伝えられる新聞種を生みだした」(Faris 1967＝1990: 111)。こうした社会状況のなか，犯罪に代表される逸脱行動は，シカゴ学派の大きな研究領域を成している。『ポーランド農民』で提出された社会解体の概念は，当初は，どちらかと言えば，社会変動の説明に用いられていたが，次第に，逸脱行動を説明する概念として洗練されていく。その一方で，親密な私的集団が逸脱的文化を伝達する側面にも注意が払われ，後に，逸脱の文化学習理論として分類される一群の研究が生み出される。

こうした初期の実証研究に，スラッシャーの『ギャング』(Thrasher 1927) がある。1313ものギャングを調査した彼は，因襲的な組織の欠けた空間的・社

会的・時間的な隙間地帯（interstitial area）がギャングを生み出す重要な要因であることを指摘する。こうした基礎的条件のもとで形成された初期のギャングは，内部における緊密な相互作用と，非難や敵対など外部との相互作用を通して成員の仲間意識を強め，本格的なギャングに成長していく。こうしてギャングは，社会解体状態にある移民のスラム地区において，子どもを健全に方向付けられない家族やコミュニティの代替物となる。ギャングが育む文化は，単調で月並みな日常生活をうち破ることに価値を与え，時として，若者たちの犯罪を促す（佐藤 1997)。

シカゴ学派の逸脱研究で後世にきわめて大きな影響を及ぼしたのは，一連のショウ（Clifford Shaw）の研究である。彼は，地図を用いた統計的調査および生活史を用いた質的調査の双方で，多数の業績を残している。ショウら（Shaw et al 1929, 1942）は，警察と裁判所の公式記録に基づき3種類の地図を作製する。一つは，非行少年の居住地を点で示したスポット・マップである。二つは，シカゴを140の地区に区分し，それぞれの地区について全少年人口に占める非行少年の割合を示した非行率マップである。三つは，シカゴ都心部を中心とするいくつかの同心円を想定し，それぞれについて非行率を示したゾーン・マップである。以上の結果，非行が多発する地域は，(1)重工業や商業地区に近接し，(2)経済的地位が低く，(3)外国からの移民や黒人が多い，という結論に達している（Vold and Bernard 1985＝1990: 190-5)。その一方で，ポーランド系移民2世のスタンレー少年による長文の自伝を用いた『ジャック・ローラー』(Shaw 1930）に代表されるように，ショウは，非行少年の生活史を集めた事例研究も多数行っている（Shaw et al 1931, 1938)。その基礎的な発見事項は，以下の通りである。(1)非行少年は，知能・身体・人格の点で一般の人びとに劣らない。非行多発地域では，(2)子どもの行動を統制する伝統・制度・世論が崩壊して，子どもの非行が大人から容認されており，また，(3)非行の機会が多数存在する一方で，合法的な成功の機会が少ない。(4)非行は，幼少時に遊びの一環として始まる。(5)非行の方法は，年長から年少の少年へ伝達される。

(6)公的な社会統制は，こうした過程を止められない。(7)非行少年が自分を犯罪者と自覚するのは，非行歴のずっと後のことであり，それは，街角や矯正施設における成人犯罪者との継続的接触と，一般社会からの拒否およびスティグマ付与の結果である（Vold and Bernard 1985＝1990: 195-7)。

ミード(George Herbert Mead)に強い影響を受けたサザランドは，人びとの相互作用と意味世界の多元性を重視しながら，犯罪者が遵法行為より違法行為を有利とする状況の定義を身近な対人的接触を通して学習する過程を，分化的接触（differential association）の理論として定式化した（Sutherland 1947)。こうした理論化の一方で，サザランドは，興味深いモノグラフも残している。『プロの窃盗犯』(Sutherland 1937）は，主に1905年から25年にかけて職業的に窃盗や詐欺を行っていたコンウェル氏との長時間にわたるインタビュー記録を編集したものである。サザランドは，コンウェルの語りを通して，プロの窃盗犯たちが集団として保持しているテクニック，掟，地位，伝統，コンセンサス，組織などの生活様式とその機能的連関を記述し，プロ窃盗集団が他の職業集団とかなり類似した存在であることを示している。『ホワイトカラーの犯罪』(Sutherland 1949）は，窃盗犯とは対極に位置すると一般に思われている企業上層部の人びとによる，独占禁止法違反，リベート，特許権・商標権・著作権の侵害，広告における虚偽表示，不当労働行為，財務会計の操作など，さまざまな犯罪的行為を描いている。サザランドは，ホワイトカラーによる犯罪も，犯罪行動の一般理論のなかに含めるべきだと主張し，他の犯罪行動と同様に分化的接触によって説明できることを示唆している。サザランドによるこれらの作品は，「世間の人びとに自明視されていたり，逆に全く異質なものとみなされている特定の社会生活を入念に記述し，それまでとは異なった光を当てて，その世界の意味を問い直そうとするシカゴ学派のエートス」（宝月 1990: 280-1）をよりよく実践している。

3　シカゴ学派の活躍した時代

ここまで，シカゴ学派の諸成果について概観してきた。シカゴ学派が取り組んだ主題を一言で要約すれば，「移民の大量流入によって形成された新しい都市的環境における人びとの適応と不適応の問題」となろう。それでは，その時代がどのようなものであったのか，具体的な歴史を振り返っていきたい。

3.1　経済的繁栄と大衆文化

1776年の独立宣言をもって成立したアメリカは，ヨーロッパ諸国に対し後進国・後発国であった。大西洋岸のいわゆる独立13州から出発したが，19世紀半ばまでには太平洋に達する。この広大な土地の確保と，それにともなう人口の西方への移住は，農地の増大を意味し，アメリカを農業国家として発展させていく。そして，自らの農地を自ら耕す独立自営農民が，当時のアメリカ人の理想像であった。

1861年から5年の歳月を費やした南北戦争は，世界で初めての近代戦と呼ばれ，工業生産力で優位に立った北部軍の勝利で決着する。この南北戦争が，アメリカが工業国として発展していく転換点となる。広大な国内市場を持つアメリカは，鉄道，運河，道路などの国内交通の整備や関税障壁によって，自己完結的な国民経済の形成をはかる。この結果，19世紀末には，イギリスと肩を並べる先進工業国になった[4]。

国際経済におけるアメリカの地位を揺るぎないものにしたのは，1914年から18年まで主にヨーロッパから25か国が参戦した第一次世界大戦である。交戦諸

4　1900年の段階でアメリカとイギリスと比較すると，国民総生産では，アメリカ187億ドルに対してイギリス100億ドル，国民一人あたりの国民総生産では，アメリカ246ドルに対してイギリス243ドルである（長沼・新川 1991: 7-8）。なお，アメリカの時系列的な統計については，合衆国商務省編1986が便利である。

国の軍需物資や食料品の需要にこたえるかたちで，その巨大な生産力がいっそう拡大する。戦争に直接関係した鉄鋼や穀物の生産高増加は目覚ましく，例えば，粗鋼は，ピークの1917年に戦前の５割増（3092万トン→4517万トン）となり，小麦の収穫高は，27%増収（2044万トン→2591万トン）した。それまで，アメリカは，資本の不足した後発国であり，イギリスをはじめとするヨーロッパ諸国の投資を仰ぐ債務国であった。だが，大戦中にさまざまな物資をイギリスやフランスなどへ大量に輸出することによって，アメリカは，一気に債務国から債権国へと転換する。こうして，世界の金融の中心は，ロンドンのシティからニューヨークのウォール街へ移り，世界の経済に対するアメリカの影響力は決定的なものとなる。（長沼・新川 1991: 15-7）

シカゴ学派が活躍した1920年代のアメリカは，上記のような経済発展の延長線上にある。1920年から21年にかけて，短期だが激しい戦後恐慌に見舞われ，失業率は12%に達し，ストライキが頻発する。しかし，その後，アメリカ経済は急速に持ち直し，1921年から29年にかけて年平均6%の成長を果たした（表１参照)。国民総生産は，名目で5割の増加（696億ドル→1031億ドル）であったが，物価水準が下落気味のため，実質では6割増ということになる。一人あたりの国民総生産でも，実質で42%増加（1958年価格で1177ドル→1671ドル）した。大戦で疲弊したヨーロッパ諸国とは対照的に，アメリカ経済は，相当な速度で着実に成長を続けていた。（長沼・新川 1991: 22-3）

表１　アメリカの国民総生産

年	名目		実質(1958年価格)	
	総額(10億ドル)	1人当り（ドル)	総額(10億ドル)	1人当り（ドル)
1890	13.1	208	52.7	836
1900	18.7	246	76.9	1,011
1910	35.3	382	120.1	1,299
1920	91.5	860	140.0	1,315
1930	90.4	734	183.5	1,490
1940	99.7	754	227.2	1,720

（合衆国商務省編 1986: 224）

こうして「繁栄の10年」と呼ばれる1920年代のアメリカは，大衆消費社会の様相を見せ始める。それをもっとも明確に示すのが，自動車の普及である。1920年には924万台だった自動車登録は，1930年には2675万台に達する（表2参照)。これは4.6人に1台，1.1世帯に1台という値である。日本が同様の普及率に達するのは，1970年代を待たねばならない。この自動車の普及に貢献したのが，1908年から27年までの19年間にわたり，1500万台も製造されたT型フォードである。近代的流れ作業と19年にわたる長期量産によって画期的な高性能・低価格を実現し，自動車を「持てる者」の贅沢品から労働者でも買える生活必需品にした。1908年当初850ドルしたT型フォードは，末期の1925年には290ドルまで下がった。しかし，自動車を所有することが当たり前の時代が来ると，人びとは，移動目的以上のものを自動車に求めるようになり，質実剛健でどこにでも転がっているようなT型フォードは，見向きもされなくなる。こうした1920年代の消費者の心をつかんだのが，広告・デザイン・クレジットという販売戦略を駆使したGM（General Motors）社である。GM社は，低価格車から高級車に至るフルラインの品揃えと毎年のモデルチェンジを巧みに宣伝して人びとの欲望をくすぐり，その欲望をすぐさま現実に変える割賦販売の仕組みを整えて，飽和しつつあった自動車市場に風穴を空けた。(Batchelor 1994)

表2　アメリカの自動車登録

年	自動車登録(1000台)
1900	8.0
1910	468.5
1920	9,239.1
1930	26,749.8
1940	32,453.2

（合衆国商務省編 1986: 716）

自動車の普及とともに大衆消費社会への発展を象徴したのは，電化の進展であった。電気の供給を受けている住宅は，1920年には，34.7%にすぎなかったが，1930年には，68.2%（都市部84.8%）と倍増している。また，住宅用の電気

使用量を見ると，1920年の31.9億キロワットが，1930年には，110.2億キロワットと4倍近くに増えている（合衆国商務省 1986: 827-8)。こうした環境の整備が，冷蔵庫，洗濯機，掃除機などの家庭用電化製品の普及を後押しする。家庭用電化製品の生産額は，1920年の8280万ドルが，1930年には1.6億ドルと2倍に増えている。とりわけ，1920年にピッツバーグで初めて放送が行われたラジオは，新しいマス・コミュニケーションの花形として，生産額が，1920年の1700万ドルから，1930年には，一気に2.3億ドルになるという驚異的な伸びを示す（合衆国商務省 1986: 700)。そして，電気は，夜でも昼間ほどの明るさを放つ歓楽街（bright light area）を形づくった。

経済成長にともない，人びとの生活にも変化が現れる。日常生活が仕事・家庭・余暇という3つの部分にはっきりわけられるようになり，余暇が増大した。工場労働者は，週5日半の労働が普通になる一方で，1920年代にその数が40%も増加したホワイトカラーは，週休2日の40時間労働で，年次休暇が与えられるようになる。大量生産による安価な保存食品・既製服・家電製品などの普及は，家事労働の負担を大幅に軽減する。高校の在籍者数が1910年から1929年の間に4倍に増え，1929年には高卒者の3分の1以上が大学に進学するようになり，多くの人が学校に長く在籍する時代が来た。電気の使用は，人びとを夜更かしにする。(Norton et al 1994＝1996: 4巻285-7)

こうして増えた余暇の時間は，ドライブ，スポーツ観戦，映画，音楽，買い物などの娯楽に費やされる。余暇活動に費やされた金額は，1919年には25億ドルであったが，1929年には，43億ドルを超えるようになる。映画は，アメリカで最大規模の産業に発展する。1922年には，映画館に毎週4000万人以上の人が訪れ，1930年には，その数が1億人に達する。当時は喜劇映画の全盛時代で，チャップリン（Charles Chaplin）をはじめとする多くの喜劇俳優が活躍した。スポーツ観戦もまた盛んになり，次々と大衆のヒーローが生まれていった。ボクシングでは，コロラド州の片田舎からニューヨークにやって来て重量級チャンピオンを勝ち取ったデンプシー（Jack Dempsey）が，スポーツ興行で初めて100

万ドル試合を行う。野球では，ベーブ・ルース（Babe Ruth）である。ニューヨークのヤンキース球団で活躍した彼は，1914年から35年の間に12回本塁打王を獲得した。1920年代は，別名「ジャズ・エイジ」(jazz age）とも呼ばれる。南部の黒人音楽だったジャズが，シカゴやニューヨークなどの北部諸都市に伝播し，一気に大衆化する。ブロードウェイのミュージカルでは，ジャズとクラシックを融合させたガーシュイン（George Gershwin）が名声を得ていた。音楽の急激な広まりには，レコードとラジオが大きな役割を果たした。ポピュラー音楽にあわせて踊るチャールストンも大流行する。このように，1920年代，豊かになったアメリカ社会を背景に，大衆文化が花開いた。(Norton et al 1994＝1996: 4 巻302-15)

ニューヨーク市場の株価は，1927年から上昇し始めた。投資ブームの始まりである。信用貸しによる投機目的の投資が，さらなる投資を呼び込み，実体経済とはかけ離れて株価が高騰していった。いわゆるバブル経済である。大恐慌の直前には，株価は，かつての2倍になっていた。1929年10月24日，後に「暗黒の木曜日」と呼ばれた株式の大暴落によって，アメリカ社会，そして，世界は，大恐慌に陥っていく。いわゆるアメリカ的生活様式が確立し，現代社会のルーツとも言える繁栄の1920年代は，こうして幕を閉じるのである[5]。

3.2　外国からの移民

シカゴ学派のモノグラフのうち，こうした経済的繁栄にともなう大衆消費社会の様相をテーマとしたものは少ない。デパートで働く女性店員たちの世界を描いたドノヴァンの『セールスレディ』(Donovan 1929; 中野・水野 2001, 2002）は，ほとんど唯一の例外だろう。シカゴ学派は，こうした繁栄が不可避

5　1920年代の雰囲気を知るには、多数の映像資料とともに当時の主な出来事を振り返った『映像の世紀 第3集 それはマンハッタンから始まった――噴き出した大衆社会の欲望が時代を動かした』(1995年5月20日にNHKで放送）が有益である。NHKソフトウェアよりDVDが発売されている。

的に生み出す近代都市の陰の側面に強い関心があった。すなわち，物質的に豊かになっても必ずしも幸せにはならないという逆説，近代社会の悲哀に対する強い感受性を持っていた（Plummer 1997: 5-7)。これまで見てきたようなアメリカの繁栄を支えていたのが，次々と都市に流入してきた移民である。新天地に夢を抱いてやって来た移民は，規格化と機械化によって熟練労働者を必要としなくなった工場や建設現場に，安価な労働力を大量に供給した。

1790年の最初の国勢調査で393万人だったアメリカの総人口は，1900年7621万人，1920年1億0602万人，1930年1億2320万人とほぼ一貫したペースで増加をし続け，2000年には2億8142万人となっている（表3参照)。これは，210年間で70倍という驚異的な伸びである。言うまでもなく，こうした大幅な人口増加は，世界各地からアメリカへやって来た移民による社会増加の影響がきわめて大きい。アメリカ社会を考える上で，移民は大変重要な要素である。

表3　アメリカの総人口

年	総人口(人)
1890	62,979,766
1900	76,212,168
1910	92,228,496
1920	106,021,537
1930	123,202,624
1940	132,164,569

(U. S. Census Bureau 2002)

1790年，総人口の半数以上をイギリス系が占め，以下，アイルランド系7.8%，ドイツ系7%，スコットランド系6.6%，オランダ系2.6%，フランス系1.4%，そして，20%が黒人であった。英語を話し，プロテスタントを宗教的信条とする人が多数派を形成し，1920年代のアメリカと比べれば，人口はかなり同一性を保っていた。また，独立宣言後の約半世紀は，独立戦争とナポレオン戦争，加えて，ヨーロッパ側の人口流出規制もあって，移民は停滞気味であり，アメリカ生まれの人口が増加した。今日あるような多民族国家アメリカの姿を決定的にした

のは，1840年代末から1920年代までにやってきた外国からの大量移民である（表4参照)。1850年から1919年までの70年間に，合計3113万人，年平均44万5千人が，アメリカに到着した。移民の数は，1900年から1909年に頂点に達し，なかでも1907年は125万5千人と最高を記録した。1907年のある日には，移民局のあったニューヨークのエリス島に，それぞれ2200人の乗客を乗せた客船が15隻も到着したという。(Green 1994＝1997: 24-5, 47)

表4　アメリカに到着した移民者数

年	移民者数(人)
1820-29	128,502
1830-39	538,381
1840-49	1,427,337
1850-59	2,814,554
1860-69	2,081,261
1870-79	2,742,137
1880-89	5,248,568
1890-99	3,694,294
1900-09	8,202,388
1910-19	6,347,380
1920-29	4,295,510
1930-39	699,375
1940-49	856,608

（合衆国商務省編 1986: 105-6）

こうした大量移民のプッシュ要因としては，第一に，ヨーロッパの人口爆発が挙げられる。1750年から1845年の間に1億4千万人から2億5千人と，ヨーロッパの人口は，100年で倍増した。この人口急増にともなう農地の不足，また，農作物の商品化，農業の合理化，小作料の上昇，度重なる凶作などによって，多くの人びとが農村で生活できなくなっていた。しかし，ヨーロッパ諸都市の工業は，農村の過剰人口を吸収するほどには発展していない。そのため，アメリカで開拓農民となること，あるいは，アメリカでお金を貯めて帰国後に故郷で土地を買うことを目指して，大勢の農民が大西洋を渡っていった。19世紀のヨーロッパで頻発した革命と民衆蜂起もまた，大量の移民を生み出す要因

である。1848年のドイツ3月革命失敗の結果，多くの亡命者がアメリカに渡った。19世紀の間，国家を失っていたポーランド人は，占領国の同化政策に反発して国外に出る者が後を絶たなかった。宗教的迫害は，17世紀の清教徒以来，移民の要因であり続けた。19世紀の宗教移民の最大勢力は，ロシアのユダヤ人であった。(Green 1994＝1997: 25-30)

交通手段の発達も，大量移民を後押しした。1819年，蒸気船が，初めて大西洋を横断する。1860年代末には，帆船は姿を消した。この結果，19世紀初頭には，35日かかった大西洋横断も，1900年には長くても2週間しかかからなくなった。また，19世紀中頃に外国移民が本格的に定期化すると，移民の輸送は，貨物船から客船に変わり，船体の大型化がはかられた。ヨーロッパの鉄道網の拡大も，ヨーロッパ中南東部から大西洋岸の港に出ることを容易にし，移民の送り出しに貢献した。ちなみに，1927年には，リンドバーグ（Charles A. Lindbergh）が，航空機による初めての大西洋無着陸横断に成功し，33時間39分でニューヨークからパリへ渡っている。(Green 1994＝1997: 30-2)

一方，大量移民を受け入れたアメリカ側のプル要因は，鉄道や運河の建設，農地の開拓，工場生産などにおける労働力の需要であった。1862年の自営農地法（Homestead Act）は，65ヘクタールの公有地を5年間耕せば，その土地を無償で手に入れることを可能にした。1860年代から70年代，人口の少ない諸州は，派手な広告合戦を繰り広げて，移民獲得に乗りだした。また，同じ時期，鉄道所有者たちも，労働力を求めて，外国や東部諸州に移民募集係を派遣した。アメリカの大西洋岸と太平洋岸を結ぶ大陸横断鉄道が開通するのは，1869年である。フロンティアが消滅したと言われる1890年代には，すでに，収益性の高い土地は入植者が入り，鉄道網の土台も築かれていた。移民の落ち着く先は，次第に，西部開拓地から都市に変わっていく。(Green 1994＝1997: 37-9)

このちょうど1880年から90年頃を境に，移民の出身国にも変化が現れる。いわゆる「新移民」の到来である。アイルランド，ドイツ，イギリス，スカンジナビア諸国などの北欧・西欧からのいわゆる「旧移民」の比率が減少し，代わっ

て，ロシア，オーストリア=ハンガリー，イタリアなどの東欧・南欧からの「新移民」の比率が急増する（表5参照)。新移民の言語は，英語ではないし，宗教は，ギリシア正教，カトリック教，ユダヤ教など，それまでのアメリカのプロテスタント文化になじみにくいものであった。そして，これらの「新移民」の多くは，都市に定着する傾向を示した。外国生まれの白人人口のうち都市部に住む割合は，1870年には53.4%であったが，1890年には60.7%，1920年には75.5%に達している。(岩野 1982: 91-8)

表5　出身国によるアメリカへの移民の変化

年			1870-79	1880-89	1890-99	1900-09	1910-19
移民数合計(100万人)			2.7	5.2	3.7	8.2	6.3
各国別百分比(%)	旧移民	アイルランド	15.4	12.8	11.0	4.2	2.6
		ドイツ	27.4	27.5	15.7	4.0	2.7
		イギリス	21.1	15.5	8.9	5.7	5.8
		スカンジナビア	7.6	12.7	10.5	5.9	3.8
		旧移民小計	71.5	68.5	46.1	19.8	14.9
	新移民	ロシア	1.3	3.5	12.2	18.3	17.4
		オーストリア=ハンガリー	2.2	6.1	14.5	24.4	18.2
		イタリア	1.7	5.1	16.3	23.5	19.4
		新移民小計	5.2	14.7	43.0	66.2	55.0

（岩野 1982: 92）

ただし，これらの移民のすべてがアメリカに永住したわけではない。19世紀末の20年間で，移民の3分の1が帰国したと言われている。これらの帰国者のなかには，失意のうちに帰る者もいれば，夢を実現して故国に土地を買いに帰る者もいただろう。帰国率は，スラブ人で約35%，ギリシア人で40%，南イタリア人で50%以上，ユダヤ人で15から20%の割合である。一般に，移民集団内の男女比が離れているほど，また，女性より男性のほうが帰国率は高かった。(Green 1994＝1997: 55)

3.3 都市化

表6 アメリカの都市人口

年	都市人口		農村人口	
	実数(人)	構成比(%)	実数(人)	構成比(%)
1890	22,106,265	35.1	40,873,501	64.9
1900	30,214,832	39.6	45,997,336	60.4
1910	42,064,001	45.6	50,164,495	54.4
1920	54,253,282	51.2	51,768,255	48.8
1930	69,160,599	56.1	54,042,025	43.9
1940	74,705,338	56.5	57,459,231	43.5

(U. S. Census Bureau 2002)

最初の国勢調査が行われた1790年，全人口に占める都市人口の割合は，わずか5.1%であり，人口1万人を超える都市も，5つにすぎなかった[6]。しかし，その後，ほぼ一貫して都市化が進む（表6および7参照)。農村人口も増加し続けていたが，都市人口は，それをはるかに上回る増加を見せた。南北戦争と第一次世界大戦は，都市化を加速させ，1920年には，都市人口が51.2%と，初めて全人口の過半数を超える。この傾向は止まらず，1990年には，75%に達した。都市人口の増加とともに，大規模な人口を抱えた大都市の数も増加していく。建国以来最大の都市であり続けているニューヨークが，初めて人口10万人を超えたのは，1820年であった。しかし，その50年後の1870年には，人口10万人を超える都市の数は，14にまで増え，さらに50年後の1920年には，68にまで増加している。1920年のアメリカの3大都市は，それぞれ人口100万人を超え，ニューヨーク562万人，シカゴ270万人，フィラデルフィア182万人となっている。繁栄の1920年代が終わった1930年には，デトロイトとロサンジェルスが新たに100万都市に仲間入りした。(U. S. Census Bureau 2002)

1850年代までは，都市の規模が中心部から半径3キロを超えることはまれで，人びとは，都市のほとんどの場所に歩いていけた。しかし，その後の都市の大

6 1950年まで、人口2500人以上の自治体に住む人びとを都市人口と定義していた。

表7　アメリカ大都市の人口(人)

年	ニューヨーク	シカゴ	フィラデルフィア	デトロイト	ロサンジェルス
1890	1,515,301	1,099,850	1,046,964	205,876	50,395
1900	3,437,202	1,698,575	1,293,697	285,704	102,479
1910	4,766,883	2,185,283	1,549,008	465,766	319,198
1920	5,620,048	2,701,705	1,823,779	993,078	576,673
1930	6,930,446	3,376,438	1,950,961	1,568,662	1,238,048
1940	7,454,995	3,396,808	1,931,334	1,623,452	1,504,277

(U.S. Census Bureau 2002)

規模化にともない大量輸送機関が現れる。1870年代以前は，乗合馬車が一般的であったが，1880年代後半に，電車が用いられるようになり，都市における電車路線の長さは，1890年から1902年の間に，瞬く間に2000キロから3万5000キロへ延びた。そして，いくつかの大都市では，交通渋滞を避けるために，高架鉄道や地下鉄が建設されるようになった。大量輸送機関の発達は，都市内の地域の機能分化を推し進め，住宅地の都市周辺部への拡大と中心業務地区の高度集積を引き起こす。多くの都市郊外で宅地開発が活気づいた。例えば，1890年から1920年の間に，シカゴ地域の宅地造成業者は，80万戸分の宅地を開発している。1920年代に入ると，自動車の急速な普及により，都市の郊外地域は，中産階級あるいは上流階級のベッドタウンとしてますます拡大・発展していった。都心部の土地不足を解消するために，1880年代には，摩天楼と呼ばれる高層ビルが，世界で初めてシカゴに現れる。1929年には，20階以上の高層ビルは，全米で377を数えるまでになり，1931年には，その後長く世界一の高さを誇ったエンパイア・ステート・ビル（Empire State Building, 102階381メートル）が完成している。さらに，都市では，工業が発展した。19世紀末には，アメリカの工業製品の9割までが都市部に立地する工場で生産されるようになっていた。(Norton et al 1994=1996: 3巻288-92; Chudacoff and Smith 2000: 65, 86-94, 220)

こうした都市の成長に貢献したのが，第一に，前節で述べた外国からの移民である。1910年の国勢調査によると，ニューヨークの478万の人口のうち，外

国生まれの白人の割合は，40.4%である（表8参照)。また，本人がアメリカ生まれで両親のいずれかが外国生まれの人びとは，38.2%であり，両者をあわせると，8割近くの人びとが移民の1世および2世ということになる。人口219万人のシカゴも，同様の傾向を示し，外国生まれの白人35.7%，外国生まれの親を持つアメリカ生まれ41.8%となっている。1910年，外国生まれの白人の割合が30%を超える都市は，これらの他に，ボストン，クリーブランド，デトロイト，バッファロー，サンフランシスコ，ニューアークなどがある。(Chudacoff and Smith 2000: 119)

表8　アメリカ主要都市における人口構成（1910年）

都市名	人口(1000人)	外国生まれの白人(%)	本人がアメリカ生まれで親のどちらかが外国生まれの白人(%)	黒人(%)	その他(%)
ニューヨーク	4,767	40.4	38.2	1.9	19.5
シカゴ	2,185	35.7	41.8	2.0	20.5
フィラデルフィア	1,549	24.7	32.1	5.5	37.7
セントルイス	687	18.3	40.0	6.4	35.3
ボストン	671	35.9	38.3	2.0	23.8

(Chudacoff and Smith 2000: 119)

都市に流入してきた人びとには，第二に，アメリカの農民がいる。1860年から1900年の間に農場が3倍に増え，なおかつ，機械化で生産性が向上したことによって，農作物の供給が需要を上回り，主要穀物の価格は，下がっていった。このため，生き残りをかけて農業経営の大規模化が進展する。そこから脱落した何千という農民が，工場労働者として北東部や中西部の諸都市に移り住んだ。就業者総数に占める農業就業者の割合は，1870年の52.0%から，1920年には29.0%にまで減少している（表9参照)。こうした傾向は，1920年代も続き，600万人と推定される農民が，自分たちの土地から離れ，都市に流れ込んだ。農業就業者の割合も，1930年には25.1%まで下がった。(Chudacoff and Smith 2000: 120, 212-3; 合衆国商務省編 1986: 127)

表9　アメリカの労働力人口の構成

年	就業者総数(1000人)	農業就業者		非農業就業者	
		実数(1000人)	割合(%)	実数(1000人)	割合(%)
1890	19,313	8,379	43.4	10,934	56.6
1900	23,754	9,404	39.6	14,350	60.4
1910	30,092	10,582	35.2	19,510	64.8
1920	33,065	9,583	29.0	23,482	71.0
1930	38,078	9,562	25.1	28,516	74.9
1940	33,892	7,887	23.3	26,005	76.7

（合衆国商務省編 1986: 127）

第三に，暴力や政治的圧力，債務による経済的拘束を逃れて都市に向かう黒人の流れがあった。この流れは，最初は，南部の諸都市に向かう。1880年から1900年の間に，テネシー州メンフィスの黒人人口は３倍に，同じくチャタヌーガは600％も増加している。しかし，次第に，黒人は，運河や鉄道に沿って北部の商業的・工業的中心地へ移動するようになった。そして，北部の諸都市で落ち着いた人びとは，雇用や賃金の情報を故郷に伝えて，親類や友人を北部に呼び寄せた。1900年には，黒人人口が１万人を超える都市が32になり，北部と西部に住む黒人のうち７割が都市で生活していた。第一次世界大戦は，黒人の北部移住を促進した。ヨーロッパからの移民が激減したにもかかわらず，戦争景気による増産で工場の人手不足が深刻だったためである。フォードの自動車工場のあったデトロイトでは，大戦のあった1910年代に，黒人人口の増加率が600％を超えた。1920年代も，北部諸都市への移住は進み，それぞれの都市の1920年と1930年の黒人人口は，ニューヨークで15万人から33万人，シカゴで11万人から23万人，フィラデルフィアで13万人から22万人，デトロイトで４万人から12万人，クリーブランドで３万人から７万人に増えている。黒人の北部諸都市への移住が一段落するのは，大恐慌後の1930年代に入ってからである。(Chudacoff and Smith 2000: 120-1, 213; 猿谷 1976)

3.4 民族文化のモザイク

このように都市は，さまざまな社会的背景を持つ人が流入して成長していた。しかし，都市は，けっして人びとの特徴を融かして均一化する「るつぼ」ではなかった。むしろ，同じ社会的背景を持つ者同士が集まって暮らしながらも互いに浸透しない「サラダボウル」のような様相を示していた。移民たちは，母国から持ち込んだそれぞれ独自の文化をアメリカの環境の中で発展させていった。以下では，その様子を，シカゴの事例で見ていこう。

まず，シカゴ住民の変遷について簡単に触れておきたい。最初のシカゴの住民は，ニューイングランド諸州や中部大西洋諸州，あるいは，近接のオハイオ州やインディアナ州などアメリカ国内からやってきた。こうした人びとは，新興都市シカゴの政治的・経済的リーダーとなっていったが，ニューヨーク，フィラデルフィア，ボストンなど歴史のある東部の諸都市のエリートに比べると，その重要性は低い。ヨーロッパ人によるシカゴへの大規模な移民は，1840年代のアイルランド移民に始まり，1848年以降の大量のドイツ移民，以下，スカンジナビア諸国からの移民が続く。シカゴへの移民の流入は，1853年にシカゴとニューヨークが鉄道でつながったことによって拍車がかかる。1860年には，シカゴの全人口11万人のうち半数以上が外国生まれであり，1890年には，ドイツ，スカンジナビア諸国，アイルランドという順番で，シカゴの 3 大民族集団を形成していた。1880年頃から，移民の出身地に変化が現れる。ポーランド人，イタリア人，東欧のユダヤ人，チェコ人，スロバキア人，リトアニア人，ウクライナ人，ギリシア人，クロアチア人，セルビア人，ハンガリー人など東欧・南欧からの移民が大多数を占めるようになる。1924年の移民割当法により，移民数は縮小したが，1927年のシカゴの全人口のうち27%が，依然として，ヨーロッパ生まれの人びとであった。こうして，シカゴは，移民たちが持ち込んだ多様な民族文化によって彩られ，何十もの言語や民族衣装，無数の自民族向けの商

表10　シカゴにおけるヨーロッパ生まれの人口

国	1920年		1980年	
	実数(人)	構成比(%)	実数(人)	構成比(%)
ポーランド	137,611	5.1	43,338	1.4
イタリア	59,215	2.2	18,593	0.6
ソ連	102,095	3.8	17,497	0.6
ドイツ	112,288	4.2	16,075	0.5
アイルランド	56,786	2.1	8,372	0.3
イギリス	37,932	1.4	5,589	0.2
オーストリア	30,491	1.1	4,370	0.1
チェコスロバキア	50,392	1.9	3,443	0.1
スウェーデン	58,568	2.2	2,155	0.1
シカゴ市の全人口	2,701,705	100.0	3,005,072	100.0

(Cutler 1982: 46)

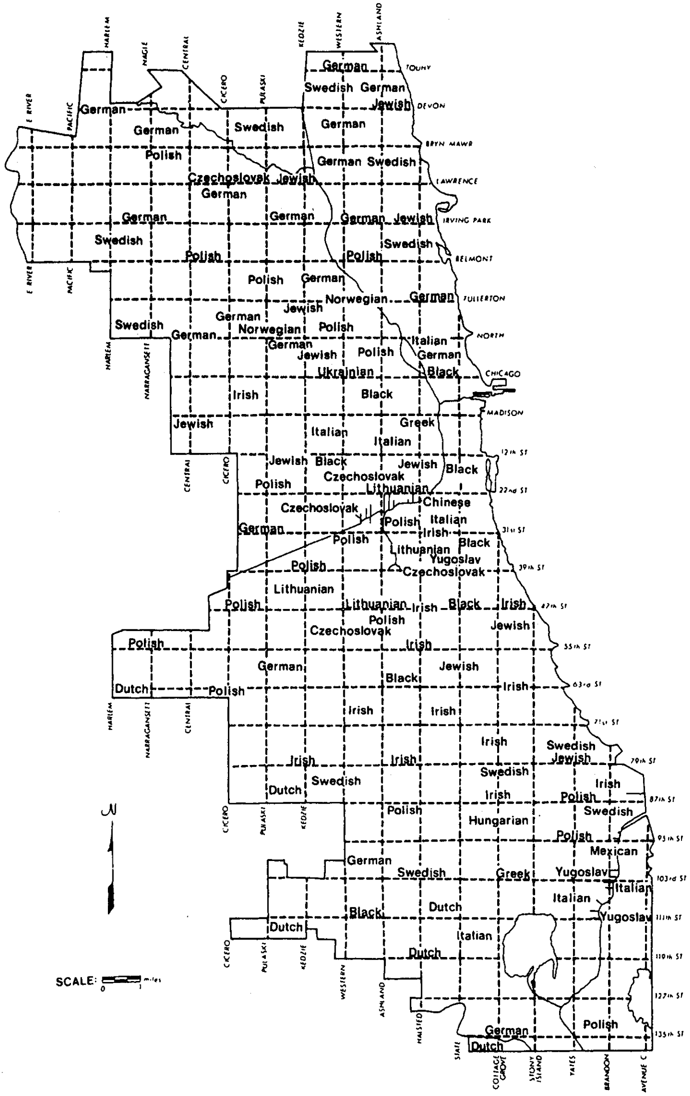
表11　シカゴにおける出身地域別外国生まれ人口の割合

国・地域	シカゴの全外国生まれ人口にしめる割合(%)			シカゴの全人口にしめる割合(%)		
	1860年	1890年	1920年	1860年	1890年	1920年
ドイツ	38.9	35.7	13.9	19.4	14.7	4.1
アイルランド	36.3	15.5	6.0	18.2	6.3	2.1
スカンジナビア諸国	4.0	16.0	11.1	2.0	6.5	3.2
東ヨーロッパ	0.3	12.5	35.8	0.1	5.3	10.6
南ヨーロッパ	0.2	1.8	11.9	0.1	0.6	3.4

(Cutler 1982: 55)

校，教会，劇場，食堂，喫茶店，新聞などで満ちていた。(Cutler 1982: 43-5)(表10および11，図1参照)

図1　1920年シカゴにおける各民族の集住地区



注：どの集住地区も，まったく同質というわけでない。この地図は，U. S. Census, church, Chicago Department of Planningのデータに基づいて，Joseph Kubalによって作られた。(Cutler 1982: 42)

3.4.1　アイルランド人

最初のアイルランド移民は，熟練工も多かったが，ジャガイモ飢饉のあった19世紀半ば以降は，非熟練・半熟連の人びとが渡ってきた。ほとんどの人びとが教育程度の低い農村出身者だったので，シカゴという都市では，運河掘削夫，荷物を運ぶ馬車の御者，鉄道建設作業員，工場や家畜一時置き場の作業員，召使い，洗濯婦など，非熟練労働者として働いた。

アングロ・サクソン・プロテスタントが支配的なシカゴのビジネス環境では，「アイルランド人お断り」という張り紙を目にすることもあった。英語を話し，アングロ・サクソンの政治システムを理解したアイルランド人は，公務員になる野心を示す。ほどなくして，多くのアイルランド人が，警察官，消防士，路面電車の職員，教師，聖職者，労働組合幹部，政治家になった。1900年には，警察官と消防士の推定40%がアイルランド系だったという。聖パトリック教会（St. Patrick's Church）は，シカゴでもっとも古い教会建築として観光名所ともなっているが，かつて日曜日には大勢のアイルランド人が通ったカトリック教会である。1855年から1915年まで，カトリック教会の司教は，一つの例外を除いて，すべてアイルランド系の人であった。

医者，法律家，教授，文筆家，建築家になる者もいた。建築家では，近代アメリカ建築の創始者の一人で，多くの摩天楼をデザインしたサリバン（Louis Henry Sullivan）が有名である。実業界では，小麦の刈り取り機を発明し，シカゴに工場を建てて富を築いたマッコーミック（Cyrus H. McCormick）がいる。しかし，何と言っても，アイルランド人が影響力をもっとも発揮したのは，政治の分野であろう。1933年から76年の長きに渡って，アイルランド系がシカゴ市長を務めた。最後の21年間市長の座にあったディリィ（Richard J. Daley）は，大都市最後の政治ボスとして，強力な集票能力を持つ民主党のマシーンを操った。他のヨーロッパ系移民に比べ経済的・社会的地位の向上の早かったアイルランド人は，既存の社会に溶け込んでいった最初の移民集団と言える。（Cutler 1982: 49-54）

3.4.2 ドイツ人

1848年の3月革命失敗後に初めてやってきたドイツ人は，19世紀後半と20世紀の最初の10年間，最大の移民集団になった。シカゴの外国生まれの人口のうちドイツ人の割合は，1860年38.9%，1890年35.7%である。1914年にシカゴのドイツ生まれの人口は，19万人と最大になった。政治的理由による最初のドイツ移民は，教育程度が高く，社会改革の志をもち，自分の考えをはっきり述べる人たちが多かった。なかには，社会主義への親近感を公言する者もいた。しかし，政治的理由の裏側には，その後のドイツ移民と同様に，経済的なものも大きかった。

多くのドイツ人は，母国でのギルドの体験から，アメリカで奴隷解放運動に加わり，急進的な政治集団や労働組合を組織した。日曜日に劇場や酒場を開店するドイツ人の習慣に対する文化的な誤解や，ノー・ナッシング運動[7]（Know-Nothing movement）にあおられた移民に対する反感によって，ドイツ人は，シカゴの支配層と対決せざるを得なくなる。そのうち，1886年のヘイマーケット暴動（Haymarket Riot）は，世界の注目を集めた。それまでにも，1日8時間労働やその他の労働条件・低賃金の改善を求めるストライキが頻発していたが，1886年5月3日に起きたマッコーミック農機具工場でのストライキでは，労働者と警官の衝突があり，2名の死者が出た。翌日夕方，ヘイマーケット広場で抗議集会を行っていた労働者に解散を命じた警官隊に爆弾が投げ込まれ，警官を含む7名の死者と67名の負傷者が出た。爆弾を投げ込んだ犯人は特定されなかったが，無政府主義の指導者と目された10名が起訴され，そのうち8名がドイツ人だった。

ドイツ人は，シカゴ市内に広く分散して暮らしている。同様に，ドイツ人の教会も，市内に散らばっている。19世紀後半に建てられた自民族向け教会のう

7　1840年代より始まったアメリカ生まれのアメリカ人にのみ投票権と公職を制限するための運動。メンバーが運動について“I know nothing.”と答えたのがこの俗称の由来。アメリカ党（American Party）と称する政党を結成したが、党内の北部派と南部派の一致を保てず、1856年に消滅した。

ち半数がドイツ人によるもので，1900年には，122のドイツ系教会がシカゴ市内にあった。

ドイツ人は，ほとんどあらゆる職業に就いているが，基本的には，熟達した職人，機械工，技術者，小店舗の経営者が多い。1900年には，パン屋と肉屋の半数以上，靴屋や石工の3分の1以上，鉄鋼労働者や機械工の約3分の1，鍛冶屋・ペンキ屋・ガラス屋・ワニス塗装屋・印刷業者・石版工・印刷工・製造業・役人のほぼ3分の1がドイツ人だった。忘れてならないのはビールであろう。20世紀初頭，ドイツ人がたくさん暮らしていたノース通り（North Av.）近辺には，ドイツ人所有のビール醸造所が30ほどあった。また，シカゴ市周辺の農村部にもドイツ人が多数暮らし，シカゴの市場へ多くの農産物をもたらしていた。これらの地域には，現在でも，ドイツ語に由来する地名が残っている。

ドイツ人は，常に集団意識が高かった。このため，早い時期から，ドイツ人向けの教会，劇場，食堂，協会，食料品店が作られた。1935年のドイツ語の新聞によれば，ドイツ人による452のクラブが，シカゴ地域で活動していたという。宿泊所や友愛組織，サッカークラブから，専門職・労働者組織，同郷人会まで，実にさまざまなクラブが紹介されている。ドイツ人のクラブ活動でとりわけ盛んだったのは，音楽である。1891年に設立されたシカゴ交響楽団（Chicago Symphony Orchestra）は，現在，世界でも第一級の実力を備え，多くの聴衆を魅了している。(Cutler 1982: 54-61)

3.4.3 ユダヤ人

ユダヤ人は，ヨーロッパのほとんどすべての国からシカゴにやって来た。ユダヤ人移民の多くは，母国での差別的な処遇のため，帰郷に対する関心は低かった。

シカゴに来たユダヤ人は，大きく2つに分かれる。一つは，バイエルン，プロイセン，オーストリア，ボヘミア，ドイツ領ポーランドなどの中欧から来たドイツ語を話す人びとである。これらの人たちは，概して，非宗教的で，都会的

で，裕福であった。もう一つは，宗教的迫害が厳しく，政治的・経済的自立の難しかったロシア，ポーランド，ルーマニア，リトアニアなどから来たイディッシュ語を話す人びとである。こちらは，貧しく，非常に宗教的で，小さな町や村におかれた政府の定めるゲットーの出身者であった。

シカゴへの初期のユダヤ人移民は，1830年代から1840年代に少しずつやって来たドイツ語を話す主にバイエルン出身の人びとである。そのなかには，シカゴ先物（穀物）取引所（Chicago Board of Trade）を組織したホーナー（Henry Horner）がいた。1848年に中欧を席巻した革命の動きは，渡米するユダヤ人を増加させ，1860年には，シカゴのユダヤ人は，1500人までになった。

1880年，東欧出身のユダヤ人は，シカゴの全ユダヤ人1万人のうちわずかな割合を占めるにすぎなかった。1881年，ロシアは，ユダヤ人虐殺（pogrom）を行い，翌1882年には，ユダヤ人を居住地から追い出すいわゆる5月法（May Laws）を制定する。このため，約半世紀にわたって，東欧からのユダヤ人脱出が続く。1900年，シカゴのユダヤ人人口は，8万人に達し，その内訳は，東欧出身5万2千人，ドイツ出身2万人，北西欧および中東出身8千人となっている。1930年には，シカゴ地域のユダヤ人は，27万5千人と推計され，その8割が東欧系であった。

19世紀最後の20年間に5万人のユダヤ人が東欧からシカゴに渡ったが，そのほとんどが，ゲットーに暮らした。マクスウェル通り（Maxwell St.）を中心とするこの地域は，人口の密集した東欧のゲットーに似ていた。通りの店では，ユダヤ教の掟に則った肉や，種なしパンが売られ，イディッシュ語の新聞局，本屋，知識人のたむろする喫茶店，ヘブライ語の学校，ユダヤ教会堂などが建ち並ぶ。他の移民街では必ず見られる酒場がないのが，異彩を放っている。人びとは，イディッシュ語を話し，あごひげを伸ばして，黒くて長いコートとロシア帽とブーツを身につけていた。ゲットーでの生活は，厳しいものだった。密集した木造の掘っ建て小屋とレンガ造りのアパートは，太陽の光もあたらず，風呂もなく，下水も整備されておらず，残飯が山と積まれていた。しかし，こ

うした環境にもかかわらず，犯罪はほとんど起こらず，死亡率や罹患率は，移民集団のなかでは最も低い部類であった。東欧出身のユダヤ人は，織物産業やタバコ工場で，低賃金長時間労働にたずさわっていた。行商人，仕立屋，肉屋，パン屋，床屋，小商店主，熟練工になるものも多かった。

シカゴの南部に暮らす豊かなドイツ出身のユダヤ人は，こうした旧世界の生活様式や信仰を続ける東欧出身の同朋に当惑していた。世界的な小売業者シアーズ・ローバック社（Sears, Roebuck & Co.）の社長も務めたドイツ出身ユダヤ人の子孫ローゼンヴァルド（Julius Rosenwald）は，東欧出身ユダヤ人のアメリカ化を促進するユダヤ手工学校（Jewish Manual Training School）などの設立に寄与した。彼は，シカゴ大学にも支援を行っている。

1910年頃から，ロシアやポーランド出身のユダヤ人は，ニア・ウエスト・サイド（Near West Side）のゲットーから，ゆったりとした道路・庭・公園を備えた閑静な住宅街グレーター・ローンデール（Greater Lawndale）地域に移り始めた。この地域と周辺は，ユダヤ人最大の集住地区に発展し，1930年のピーク時には，シカゴの全ユダヤ人27万5千人のうち，11万人が住んでいた。グレーター・ローンデールを二分しているのが，商業施設の並ぶルーズベルト通り（Roosevelt Road）である。映画館，ユダヤ人向け本屋や食料品店，公会堂，食堂，政治組織が建ち並び，シカゴ市中のユダヤ人が買い物に訪れた。しかし，この地域は，第二次世界大戦後の10年間で，黒人の住む街に急速に変わっていった。(Cutler 1982: 66-78)

3.4.4 ポーランド人

主要なヨーロッパ系移民のなかで最後にシカゴに来たポーランド人は，現在，シカゴ地域で，最大のヨーロッパ系民族集団を形成している。70万人ものポーランド系の子孫が，この地域で生活している。

第一次世界大戦まで，ポーランドは，ドイツ，オーストリア，ロシアによって分割占領されていた。このため，国ごとに集計される移民の統計から，ポー

ランド人移民の正確な数字を読みとることは難しい。しかし，その他の資料を合わせると，1860年代後半まで，ポーランド人は，ほとんどシカゴにおらず，1870年でも2000人にすぎない。しかし，その後，1930年まで，ポーランド人は，シカゴに来た最大の移民集団であった。その多くが，ポーランド農村部で生活していた教育程度の低い小作農で，貧困や徴兵，外国人の支配を逃れるために渡米した。

ポーランド人最初の集住地区は，1860年代，シカゴの中心部から北西に3キロほど離れたあたりに成立する。ここに，1867年，シカゴで最初のポーランド・ローマ・カトリック教区である聖スタニスワウス・コストカ（St. Stanislaus Kostka）教区が組織され，1877年，二つの緑色のドームを持つ壮大なバロック式の大聖堂が完成する。1890年代，この教区は，4万人もの教区員を擁し，教会では，1893年の1年間に，2000回以上の洗礼式と，400回近い結婚式と，約1000回の葬式が行われた。教会には，教区の学校が作られ，最盛期には4000人の生徒が在籍した。教会のホールは，コンサートから政治集会まで幅広く用いられた。また，教区は，独自に貯金と貸付を行う組合組織を持っていた。このように，ポーランド人は，教会を中心に生活を送った。

1910年までには，ポーランド人集住地区は，東にシカゴ川，西にカリフォルニア通り（California Av.），北にフューラートン通り（Fullerton Av.），南にシカゴ通り（Chicago Av.）で囲まれる地区まで拡大した。この地域の住民の半分がポーランド人で，10万人ほどが暮らしていた。これは，シカゴの全ポーランド人25万人の40%にあたる。ここに暮らすポーランド人の多くが，皮なめし工場などシカゴ川沿いに立地する工場で働いていた。

この他にも，シカゴの西部や南部に，教会を中心にいくつかのポーランド人集住地区が発達した。そのいずれもが，工場のそばに立地した。80%が農民であったポーランド移民は，言語的な障壁もあって，つらい危険な非熟練・低賃金労働に就かざるを得なかった。1911年の調査によれば，外国生まれのポーランド人の収入は，外国生まれのドイツ人よりも，3分の1も少なかったという。

食肉加工工場が並んだ畜舎裏（Back-of-the-Yards）と呼ばれる地域の周りには，1910年には，3万人近いポーランド人が暮らしていた。また，南シカゴの製鉄所の周辺にも，1910年には，1万8千人のポーランド人が暮らしていた。1910年から1930年にかけて，古い聖スタニスワウス地区は，ポーランド人人口が停滞気味だったが，これらの新しい地区では，約50%も増加した。

このようにポーランド人の人口が増えるにしたがい，宗教，教育，移民支援，文化，友愛，金融，社交，運動などさまざまな目的をもつポーランド人の組織も増えていく。最盛期には，4000を数えた。シカゴには，1873年設立のポーランド・ローマ・カトリック協会（Polish Roman Catholic Union）と1880年設立のポーランド全米同盟（Polish National Alliance）という二つの全米組織の本部がおかれている。ともに，保険や社会・文化プログラムを通して，ポーランド系アメリカ人の福祉の向上を目的としている。1920年には，ポーランド語の日刊新聞が5紙存在していた。しかし，現在では，Dziennik Zwiazkowy紙一紙のみになっている。(Cutler 1982: 84-91)

3.4.5 イタリア人

1880年，シカゴのイタリア人は，わずか1357人にすぎなかった。イタリア人移民のピークは，1899年から1924年にかけてである。1890年に，1万3千人だったイタリア人は，1920年には，およそ10倍の12万4千人になった。

1880年代以前にやって来たイタリア人は，比較的裕福なイタリア北部出身であった。これらの人びとは，一般的に，家族全員でシカゴに来た。ある者は，熟練・半熟練の仕事に就き，ある者は，サービス業や商業の分野で働き，また，ある者は，露天商や商店主となった。

1880年代から，イタリア移民が大挙してやって来る。こうした移民の75%以上が，イタリア南部の貧しい農村や小さな町の出身である。そして，その4分の1がシシリー島出身者であった。これらの人びとのほとんどは，母国で借金や重税による生活苦と戦い，教育も満足に受けていなかったが，出身の村と家

族を非常に大切にし，強くて豊かな感情と誇りを持っていた。イタリア南部出身の移民は，独身男性が多く，先にシカゴに渡った同じ町や地方出身の友人や親類のところに，間借り人として住みついた。

彼らは，仕事を得るために，しばしば，パドロネ（padrone）と呼ばれる同郷出身の移民労働者の手配師のところへ行った。多少の英語を話すパドロネは，非熟練労働力を必要とするアメリカ人経営者と契約し，新しく到着した移民に，特に，中西部各地で行われる鉄道敷設や建物建設の仕事を紹介した。労働者は，冬場はシカゴに戻ってきた。当時のシカゴは，こうした季節労働者の集配センターの役割を担っていた。法外な手数料や賃金をピンハネする悪徳パドロネによって，こうした仕事斡旋の仕組みは，悪評を呼び，1900年以降急速に衰える。

次第に，イタリア人は，さまざまな経済活動に携わるようになる。1916年，50%近くが，依然として，非熟練労働者であった。しかし，その割合は，1931年には30%，1950年には11%にまで減っている。鉄道敷設の求人は，重要性を減らし，イタリア人は，石切工，石工，石工の下働きなどに就いた。また，ゴミ収集人，道路清掃夫，市街電車の職員，警官など，公益事業で働く者も多かった。工場で働く人も増加した。シカゴの衣料品工場で働く人の3分の1がイタリア人（一般には女性）だった。自分で商売を始める者も現れた。食料雑貨店を開いたり，果物を輸入したり，パン屋，床屋，ペンキ屋，大工，仕立屋，音楽家，菓子屋，酒場，小さな工場などを経営した。不動産取引で成功した者も多数いた。1920年代の禁酒法の時代には，イタリア人の犯罪組織が，密造酒で大もうけした。

ニア・ウエスト・サイド（Near West Side）にあるリトル・イタリー（Little Italy）は，イタリア人が，シカゴで一番集中していた地区である。1920年代初め，この地域は，東をシカゴ川，西をポリーナ通り（Paulina St.），北をヴァンブーレン通り（Van Buren St.），南を12番通りで囲まれ，シカゴのイタリア人口のうち半数がここで暮らしていた。しかし，1920年代にピークを迎えた人口は，その後，徐々に減少していった。(Cutler 1982: 97-103)

3.4.6 黒人

19世紀の初めから，シカゴへの黒人流入は，ゆっくりだが，確実に進んでいった。1860年には，わずか955人だったシカゴの黒人人口は，50年後の1910年には，4万4千人にまで増えた。だが，それでも，シカゴの全人口の2％にすぎない。

最初の黒人集住地区が形成されたのは，1840年代のシカゴ川南流に沿った地区である。そこには，自由な身分の黒人と逃亡した黒人奴隷の両方が暮らしていた。1847年に，初めての黒人教会であるクイン礼拝堂（Quinn Chapel）が設立されて以来，主に，バプティストとメソジストの小さな教会がたくさん建てられた。これらの教会は，自由州やカナダへの奴隷の脱出を助けた秘密組織（Underground Railroad）に拠点を提供することもあった。1910年までには，およそ20もの黒人教会がシカゴに誕生した。

19世紀後半，シカゴの黒人人口は，その数が少ないこともあって，大きな注意を引くことはなかった。黒人に対する偏見や差別は多少なりとも存在したが，シカゴの白人の多くは，連邦の逃亡奴隷法（Fugitive Slave Acts）や州の黒人取締法（Black Code laws）に反対していた。しかしながら，黒人は，南北戦争の終結により白人と同じ権利が与えられ，なおかつ，アメリカに生まれ，英語を話し，プロテスタントを信仰しているにもかかわらず，ヨーロッパ系移民より低い社会的・経済的地位に留まっていた。1890年，シカゴの全人口の1.3％にすぎない黒人は，男性使用人の37.7％，女性使用人の43.3％を占めていた。

19世紀の終わり頃まで，黒人は，主にニア・サウス・サイド（Near South Side）で，小さな集団のまま，白人の間に分散して暮らしていた。20世紀に入り，黒人人口が急速に増加し始めると，かつてヨーロッパ系移民が住んでいた都心部に，集住するようになる。もっとも黒人の集中した地区は，都心部の商業地区の南端から39番通りに伸び，西をロック・アイランド鉄道（Rock Island Railroad），東をサウス・サイド高架鉄道（South Side Elevated）で囲まれた南北4.8キロ，東西0.4キロの帯状の地区であった。いわゆる黒人ベル

ト地帯（Black Belt）である。

第一次世界大戦のあった1910年から1920年までに，シカゴの黒人人口は，2.5倍になり，1920年には，11万人となる。戦争によるヨーロッパ系移民の減少により，シカゴで黒人が仕事を得やすくなったことに加え，綿花価格の低迷，害虫の発生による綿花への被害，度重なる洪水，人種差別など，南部側にも黒人を押し出す要因があった。Chicago Defender紙のような黒人新聞が，北部移住を促した点も見逃せないだろう。

第一次大戦期の黒人急増は，良好だった黒人と白人の関係を変質させる。それまで，黒人は，ホテルやレストランの従業員，家庭での使用人，ビル管理人，鉄道のポーターなどに就いていた。しかし，この時期，工場での仕事をめぐって，白人移民と競合するようになっていた。1910年，黒人男性労働力の51%が，家庭もしくは個人的な使用人として働いていたが，1920年には，28%に減少する。労働組合から閉め出されていた黒人は，工場のストライキ破りとして利用された。ストライキが終わると黒人は解雇されたが，このことは，黒人と白人の間に，いっそうの悪感情を生じさせた。

1920年代，12万もの新しい黒人がやって来て，1930年のシカゴの黒人人口は23万人を数えるまでになった。そのなかには，最高の教育を受け，高度な技術を身につけた黒人も含まれていた。1920年代というアメリカの繁栄の時代は，シカゴの黒人にとっても繁栄の時代であった。黒人ベルト地帯に暮らす7万5千の黒人賃金労働者を市場とする黒人の専門職・ビジネス階級が現れてきた。また，警官，消防士，市会議員，選挙区幹事，下院議員，医師，弁護士，教師などにも黒人は進出していった。黒人の子どもたちは，公立学校に通い，短期大学に進学するようになっていた。

1930年までには，黒人ベルト地帯の南端は，63番通りにまで達し，シカゴにおける黒人集住地区は，7つにまで増えている。しかし，シカゴの黒人人口の80%が黒人ベルト地帯に暮らしていた。ヨーロッパ系移民とは違って，教育程度が高く裕福な黒人であっても，黒人ベルト地帯を出て，郊外などのよりステー

タスの高い地区に転居することは不可能だったからである。白人住民は，自分たちの居住地区に黒人が入ってこないように，家賃を高くしたり，時には，脅したりした。1917年から21年までに，人種的な動機が原因と思われる爆弾事件が58件起きている。この結果，黒人ベルト地帯内部で，都心部から離れるほど経済的水準が高くなるという地域的な階層分化が生じるようになった。(Cutler 1982: 118-34)

3.5　社会的規範の弛緩

大量の移民の流入による大都市の成立と多様な文化の併存は，それまでアメリカ社会が保持してきた価値観を揺さぶらずにはいなかった。南北戦争以降，19世紀後半のアメリカ文化を特徴づけたのは，ヴィクトリア文化と呼ばれるものである。ヴィクトリア文化は，イギリスとアメリカの近代化の文化であり，福音主義的プロテスタンティズムおよびリベラル・プロテスタンティズムに起源を持つ。その担い手は，教育程度の高い都市に暮らす中産階級で，産業資本主義社会における社会的品位や，厳格な個人的道徳や，文化的規準への尊敬心を高めることに努めた。ヴィクトリア的価値観は，勤勉に働くこと，楽しみを先に延ばすこと，性的欲望を抑圧すること，自己向上に努めることなどを説く。さらに，ヴィクトリア文化は，家庭を尊重し，女性が良き母になることを求めた。(本間 1978: 14)

こうした「お上品な伝統」としてのヴィクトリア文化に対する挑戦が始まったのが，アメリカの1920年代である。「ローリング・トウェンティーズ」とも呼ばれた1920年代の生活変容を活写した現代史家のアレンは，「“ヴィクトリア朝式”とか“清教徒的”などは，非難のことばになりつつあった」(Allen 1931＝1993: 154) と書いている。「フラッパー」に代表されるこの時代の若者たちの意識や行動は，保守的な道徳律に対抗した若者文化を象徴する。1920年代を通して，風俗やマナーが急激に変わり，一般に享楽的な時代となった。こ

うした時代の雰囲気にとりわけ敏感だったのが，女性たちである。女性の服装と容姿がいちじるしく変化した。

アレンは，1920年代直前の標準的なアメリカ人女性の服装を次のように描いている。「朝食のときのスミス夫人の服装を見ると，スカートは，足首のあたりですぼまって，床上六インチの長さである。（中略）春になったので，夫人は短靴（ローシューズ）をはいている。が，冬の間はスパッツか，組紐のついたウォーキング・ブーツか，上部にバックスキンをあしらったエナメル靴をはいているので，くるぶしは見えなかった。靴下（ストッキング）の色は黒である（褐色の靴をはくときは褐色のこともある）。（中略）夫人はついさっき“エンヴェロープ・シュミーズ”[パンティを兼ねた下着]とペティコートを着用したところだ。下着の厚いひだ飾りによって，女性に生来備わった容姿が，少しでもボーイッシュに見えたりしないように気を配っている様子がありあり見える。スミス夫人は白粉は使っているが，化粧品を塗りたくりはしない。（中略）買物に出かけるために帽子をかぶるときは，後頭部にピンでとめたヴェールをつけた。水着を買うとすると，ぴったりとしたメリヤスの下着の上に絹か更紗の上衣がついていて，もちろん長い靴下をはいて着るのである。夫人の髪は長い」（Allen 1931＝1993: 20-1）。

これに対して，1920年代は，成熟した女性らしさではなく，「若さ」を強調するようになり，少年のようなほっそりとしたスタイルが，全女性の念願となる。膝までの長さのスカートが標準となる。コルセットはまったく使われなくなり，靴下や下着の素材は，木綿に代わって，絹やレーヨンになった。1926年の調査によれば，デパートで売られている女性用下着の33%が綿，36%がレーヨン，31%が絹であったという。黒だったストッキングの色も，肌色が標準となる。ペティコートは，姿を消し，女性が薄着になる傾向が顕著になっていった。かつては過激派の印と見られていた断髪（bobbed hair）は，主に便利だという理由で，若い女性の間ですっかり普及した。1920年代後半には，断髪でない20代の女性はいないほどで，30代，40代の女性のあいだでも断髪はごく当たり前の

こととなり，60代でも，別に珍しいことではなくなった。かつて，口紅と言うと，しつけの良い女性は眉をひそめたが，1920年代の頬紅や口紅の流行は，辺鄙な村にまで急速に広がった。女性たちは，化粧をしていることを，もはや隠す必要はなかった。年齢からくるしわやあごのたるみを直そうとし，眉を抜いたり，整えたり，染めたりする「美顔術」をほどこして，若さの輝きを増したり，取りもどしたりする美容院がどこの街にもできた。1917年には，所得税を納めた美容関係の人間は，わずかに2人だったが，1927年になると，1万8千もの個人や会社が納税している。化粧や美容が，一産業として地歩を固めたのである。(Allen 1931＝1993: 143-51)。

女性の服装と容貌の変化は，新しい性意識をともなったものだった。1924年から1年半，人口3万6千人のインディアナ州マンシーを参与観察した社会学者のリンド夫妻は，「高校生の年代の男子と女子10人中9人が『ペッティング・パーティ』をやっている」という文章の真偽をたずねる質問に対して，556人中約半数の高校生が「正しい」と回答したことを記録している。「公衆の面前での求愛に特に厳しく加えられていたかつての禁制は，若い人たちによって取り払われようとしている」(Lynd and Lynd 1929＝1990: 141) のである。こうした変化について，高校生を持つ母親たちは，「問題は娘さんたちの衣類です。あんな服装をされたのでは，息子たちに慎ましい恰好をさせておくことはできません」「彼女たちは，私の娘時代には絶対できなかったような調子で男の子に電話をかけてデートをしようとします」「私の息子は三人の別々の女の子からダンスに誘われどおしでしたが，そのため息子の生活が台なしになっています」と語り，自由な男女交際の増大した原因を女性の服装と積極性に求めた。(Lynd and Lynd 1929＝1990: 136-42)

こうした性意識の変化には，フロイト(Sigmund Freud)の学説も一役買ったであろう。フロイトとユンク (Carl Gustav Jung) は，1909年にすでにアメリカの心理学者を前に講演しているが，フロイトの考え方が，アメリカの一般大衆に広範囲に流布し始めたのは，第一次世界大戦後である。精神衛生にとっ

て第一の必要条件は，抑制されない性生活を行うことであり，健康で幸福でいたければ，リビドー（libido）の命ずるままに行動しなければならないということが，科学的知識として人びとの常識に組み込まれていった。自制の効用を説く聖職者は，無遠慮な批評家から，自制など時代遅れで実は危険なことであると警告された。自分の欲望に率直であることが，新しい生き方の指針となっていく。（Allen 1931＝1993: 137-8）

ヴィクトリア文化に対する挑戦は，服装や性といった私的な領域だけで起こったわけではない。経済や労働という公的な領域においても起きた。1920年代後半に起きた土地や株に対する投機ブームは，お金を動かすだけで巨万の富を得ることにあらゆる階層の人びとを夢中にさせた。楽しみを先に延ばして勤勉に働くヴィクトリア的価値観など，いまや，人びとの目には時代遅れに映るようになった。

1925年の夏から秋にかけて，熱帯の雰囲気をただよわせるマイアミは，熱狂的な土地取引所と化していた。不動産事務所は２千軒，不動産業者は２万５千人だったと言われている。誰もが，土地の転売で金儲けをしていた。「土地ブームの始まる10年ほど前，土地を24万ドルで売らないかともちかけられたニューヨークの弁護士は，1923年に，80万ドルで手放した。その土地は，細分されて売り出され，総計150万ドルの価格で処分された。しかも，その土地は，1925年には，400万ドルになった」という類の話が無数にあった。しかし，1926年の春と夏には，明らかに土地ブームは崩壊し始めていた。これを決定づけたのが，９月に来た２つの台風である。台風が別荘の屋根を吹き飛ばすのと同時に，不動産会社事務所のほとんどで人影が見えなくなった。（Allen 1931＝1993: 357-74）

こうした投機熱の焦点は，マイアミからニューヨークのウォール街へ移っていく。そこでは，1927年頃から大強気相場が始まっていた。株は高すぎて危険に見えるという専門家の意見もあったが，大衆は，株を買い続けた。株価は，乱高下しながらも，結局，値上がりしたからである。『楽園のこちら側』（This

Side of Paradise, 1920年）で奔放な若者たちの行動を描き，一躍時代の寵児となった作家のフィッツジェラルド（Francis Scott Fitzgerald）は，当時の様子を次のように描写している。「一九二七年のニューヨークのせわしなさはヒステリーの一歩手前とでも表すべきものだった。（中略）ショウはますます大がかりになり，ビルはますます高くそびえたち，モラルはますますゆるめられ，酒はますます安価になっていた。（中略）かくの如く浮かれ騒ぐ街にあってはたゆまぬ努力など一文の値打ちもない。というわけで『稼業』(racket）ということばがからかい半分に使われ始めた。てっとり早く金を稼げるもの，これが全て『稼業』である。（中略）私の行きつけの床屋は株に五十万ドルばかり投資して引退していたし，私のテーブルまでやってきてあいさつしたり，あるいはあいさつし忘れたりする給仕頭たちは考えてみれば私などより遥かに金持であった」(Fitzgerald 訳書1984: 209-11)。一夜にして財産を作ったという話が，人びとの口の端にのぼり，投機熱が国中に感染しつつあったのである。しかし，崩壊は確実にやってきた。周知のように，1929年10月，株価の大暴落が起こり，世界を巻き込んだ大恐慌の引き金となった。

3.6　排他主義

1920年代は，経済的繁栄の時代とともに，異質なものに対する排他主義が渦巻いた時代でもある。その矛先は，東欧・南欧からの新移民や黒人たちに向けられた。

19世紀中ごろから始まった移民の急増により，アメリカは，移民の受け入れに次第に慎重になっていく。アメリカの移民政策は，1875年までのほとんど制限を設けなかった寛容と推進の時期と，それ以降の制限的な時期の2つに大きく分けられる。移民の制限は，まず，アメリカ社会に害を及ぼす恐れのある人びとを排除する質的な制限から始まった。初めて移民を制限する法律が制定された1875年，売春婦と犯罪者の入国が禁止される。次いで，1882年には，精神

障害者および公共の負担となる者，1891年には，一夫多妻者，伝染病患者，反道徳的な前科のある者，1903年には，外国人無政府主義者，1907年には，両親に伴われない16歳未満の子どもが入国禁止となった。その一方で，国籍や人種による移民受け入れ拒否も進んでいく。1882年，中国人排斥法によって，中国人のアメリカ移民が一切禁止された。また，1894年に設立された移民制限連盟は，移民の新たな入国条件として30から40語からなる文章の読解力を試す識字テスト（literacy test）を創設する法律制定を提唱した。ロッジ（Henry Cabot Lodge）上院議員は，1896年，上院でこの法案の趣旨説明を次のように行っている。「この文盲テストはイタリア人，ロシア人，ポーランド人，ハンガリー人，ギリシア人，アジア人に最も重い負担となり，英語圏からの移民ないしドイツ人，スカンジナヴィア人，フランス人にはきわめてわずかしか，あるいはまったく負担にならないでありましょう。（中略）……文盲テストによって排除される移民は，概してわが大都市に密集する群衆のなかに留まる人びとであること……文盲率がスラム人口と，また外国生まれないし両親が外国生まれの犯罪者，貧民，少年非行者の数と平行していること……またわが国にもたらす金が最も少なく，また最もすみやかに公私の慈善に扶養を頼るにいたる移民であること，が判明しております」（大下他編 1989: 137-8）。明らかに，1880年から1890年にかけて急増した東欧・南欧からの新移民の排除を目的としている。クリーブランド，タフト，ウィルソンの各大統領が拒否権を発動したにもかかわらず，1917年，識字テスト法が成立する。さらに，1921年には，出身国別に移民の数を制限する移民割当法が，やはりウィルソン大統領の拒否権をはねのけて可決された。この法律により，質的な制限に加え，量的な制限が規定された。すなわち，アメリカが各国から１年間に受け入れる移民の数を，1910年の国勢調査におけるその国の出身者数の３％と定め，その合計数の上限を35万人としたのである。さらに，３年後の1924年の移民割当法は，国別移民割当の計算基準を，新移民が大量に到来する以前の1890年の国勢調査に戻し，さらに，移民許可数を２％に減少させた。（Green 1994＝1997: 96-109; 川原 1990）

こうした移民を締め出す法律が次々と制定できたのも，大衆の支持があればこそである。この時代に広くアメリカ社会に浸透していた排他主義を象徴するのが，クー・クラックス・クランの復活である。南北戦争後の再建期にテネシー州で組織され，急速に南部各地に拡大していったクランは，白い山型頭巾とガウンで全身を覆い，夜間ひそやかに黒人や黒人支持の白人を襲撃して，リンチを加えた。1870年および1871年にクランを取り締まる連邦法が制定され，クランの活動は，一時下火になる。1915年に再興されたクランは，初めは低調であったが，1920年に広報活動の専門家を迎えることによって，一気に会員数を増やした。白服，白頭巾，火の十字架，儀式に使われる謎めいた語彙といった神秘主義的な演出とともに，新規加入会員の会費10ドルのうち4ドルがその人を勧誘した会員の懐に入るという仕組みを作ったことも大きかった。会員は，南部だけでなくアメリカ全土に広がり，1924年初めにその数は450万人とも言われている。クランの目的を一言で表せば，アメリカ生まれの白人でプロテスタントの人びとの利益を守るということになろう。クランの指導者の一人エヴァンズ（Hiram W. Evans）は，1924年に出版した『さあ，共に考えよう』（Come Now, Let Us Reason Together）のなかで，次のように語っている。「……力は団結にある。合衆国のすべての人種，すべての宗教，すべての皮膚の色の者が，この国生まれの白人非ユダヤ人キリスト教徒である者を除いて，すべて組織されている。（中略）未組織状態の彼らは，彼らの所有物を狙う組織された人びとによる搾取の対象になってきた」（大下他編 1989: 172)。クランは，「純粋なアメリカニズム」を標榜し，外国的なものと不道徳なものを敵として超法規的な「正義」を行使していった。(Norton et al 1994＝1996: 3巻164－5, 4巻295-7; Allen 1931＝1993: 95-100)

このように社会に広がる排他主義の雰囲気は，冤罪事件も生み出した。いわゆるサッコとバンゼッティの冤罪事件である。1920年春ボストン，製靴会社の会計主任と守衛が殺され，1万5千ドルが奪われた。殺人犯として，靴職人サッコ，魚の行商人バンゼッティが逮捕される。証拠不十分にもかかわらず，死刑

の判決が出される。二人が，イタリア移民であり，無政府主義者と見られたために，裁判官や陪審員の心証を悪くしたからである。サッコとバンゼッティの不当逮捕は，世界中の知識人による抗議行動を巻き起こした。この事件をきっかけに，排他主義を貫いていたアメリカの国民のなかにも，アメリカの人道主義を問う声が出てきた。だが，1927年8月，サッコとバンゼッティは，電気イスで処刑される。彼らの無罪が認められたのは，およそ50年後の1977年のことであった。(Norton et al 1994＝1996: 4巻297; Allen 1931＝1993: 120-3)

新移民や黒人も，黙っていたばかりではない。排他主義に対する抵抗は，時に暴動に発展することもあった。第一次大戦期，供給の少なかった住宅をめぐる競合は，人種間の緊張をもっとも高めた。急増した黒人が，それまでの黒人集住地区を超えて住もうとすると，爆弾を初めとするさまざまな暴力が，黒人に向けられた。1919年，シカゴで非常に激しい人種暴動が発生する。7月の焼け付くほど暑かったある日曜日，白人用水泳場と黒人用水泳場の非公式の境界線である29番通りのミシガン湖岸で，白人水泳場に入り込んできた17歳の黒人少年に白人が投石して溺死させるという事件が起きる。この黒人少年の溺死が引き金となって，高まっていた人種間の緊張が一気に爆発した。州兵が出動して秩序が回復されるまでの6日間，暴動は続いた。黒人23名，白人15名の死者と，537名の負傷者が出た。この事件まで，黒人が抱える諸問題について，社会改革家でさえ，さほど関心を払っていなかった。だが，これを機に，特に黒人の住宅不足問題に真剣な眼差しが注がれるようになった。(Allen 1931＝1993: 93-4; Cutler 1982: 122)

1920年代と言えば，禁酒法の時代である。1920年1月に効力を発した合衆国憲法修正第18条は，酒類の製造・販売・運搬等を禁止した。禁酒運動は，過度の飲酒に伴う深刻な弊害の除去を目指して植民地時代以来の長い歴史を持つが，アメリカの第一次世界大戦参戦は，禁酒法の成立に大きな影響を与えた。政府は，軍人に対する酒類販売と，私的使用を目的とした酒類の輸送を禁じた。食糧確保のため穀物から蒸留酒を作ることが禁止された。また，ビール醸造業者

の多くが，敵国であるドイツ系の人びとであったことも，禁酒法賛成の世論形成に寄与したかもしれない。戦争は，ユートピア的な理想主義の雰囲気をもたらし，戦争遂行に必要な能率・生産・健康のためにあらゆるものが犠牲になることを許した。酒もその一つである。ところが，禁酒法施行後，現実のアメリカ社会には，密造酒ともぐり酒場がはびこり，国中に法律無視の風潮が広がった。第一次世界大戦が終結し，平時に戻った1920年代は，すでに見てきたように，経済的繁栄の享楽的社会を生み出していた。また，カポネに代表される組織犯罪が，密造酒を資金源にして急速に勢力を伸ばしていた。世論は，禁酒法反対に傾き，当初は，禁酒法に賛成していたロックフェラー親子らの大物支持者たちも，次々と反対派にまわる。また，大恐慌後の政府の財政難という事情もあった。1933年12月に，およそ14年間続いた禁酒法はついに廃止される。(岡本 1994; Allen 1931＝1993: 327-56)

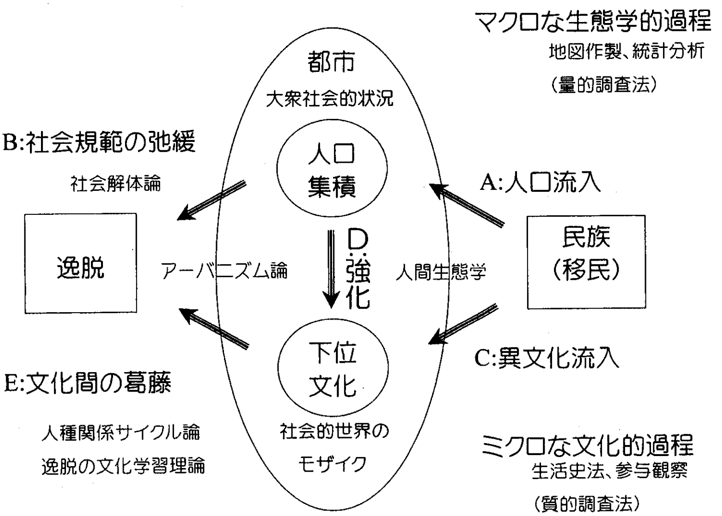
1920年代の禁酒法制定によって頂点を示した禁酒運動は，直接には，禁酒が経済的成功を約束するという信念を社会制度の改革を通して実現しようとした点で，1895年から1920年までアメリカを覆っていた革新主義の一例としてとらえられよう。しかし，そうした活動の背後に，社会の変動によって地位を低下させた諸集団の利害を読み取る者もいる。歴史家のホフスタッターは，禁酒運動を，世紀転換期のアメリカ社会で相対的に支配力を失いかけたプロテスタントの旧移民が多く居住する農村が，カトリックの新移民に支配された都市へ反撃を企てたものであると位置づけている (Hofstadter 1955)。同様に，社会学者のガスフィールドは，「地位をめぐる政治」(status politics) という概念を用いて，禁酒運動を分析する。「地位をめぐる政治」とは，ある集団が自分たちの価値観をその他の諸集団に認めさせて自らが支配する統合された社会を作り出す政治過程を意味する。禁酒法は，必ずしも厳格に実行されなかったが，禁酒法を推進した集団にとっては，自分たちの価値観を法律という具体的な形で示せた点で，象徴的な意味があった (Gusfield 1986)。ホフスタッターやガスフィールドの観点からすれば，禁酒法は，新しく台頭した勢力に対するいわ

ゆるWASP（White Anglo-Saxon Protestant）と呼ばれる既存勢力による排他主義の表れと解釈することも可能であろう。

4　まとめ

ここまで，都市，民族，逸脱というシカゴ学派の主要な3つの実証研究領域について概観し，当時の社会状況を振り返ってきた。シカゴ学派の研究が前提としている社会状況をまとめると，図2のようになる。

図2　シカゴ学派が前提とした社会状況



この図の出発点は，19世紀後半以降，ヨーロッパなどの外国あるいはアメリカ南部などの国内から都市に大量に移り住んできたさまざまな民族集団である。多様な社会的背景を持つ人びとによる移民は，都市に，人口流入という物理的影響と異文化流入という文化的影響を与える。その背景には，もちろん，工業化によって経済的繁栄を遂げた都市における大きな労働力需要がある。

継続的に流入する人口は，都市の基本的特徴である人口集積を促進する。

1920年には，都市人口が過半数を超え，100万都市は3つを数えた。そして，その結果生じた流動的で高密度な人口は，人びとの接触を，物理的近接にもかかわらず一時的で部分的なものに変え，原子化した個人から成る大衆社会を生み出す（矢印A)。

こうした大衆社会では，人びとに生き方の指針を与えていた伝統的な第一次集団が消え去り，社会的規範の弛緩が起きる。アノミー的状況において，これまで抑制されてきた欲望が解き放たれ，利己主義的態度が正当化される。その結果，既存の常識では考えられなかったさまざまな逸脱行動が多発する。モラル革命とも呼ばれる性意識の変化や土地や株への投機ブームに見られるヴィクトリア文化への挑戦は，こうした状況を象徴する（矢印B)。

その一方で，移民は，多様な文化を都市にもたらす。20世紀初頭，ニューヨークやシカゴなど大都市の人口の7から8割が外国からの移民1世および2世であった。先に移民した親類や同郷者を頼って移り住む結果，同じ社会的背景を持った者同士が集住する。そのため，特徴ある地域がいくつも生成し，それぞれ独特の文化を保持する。こうして都市は，さまざまな下位文化が繁茂する社会的世界のモザイクとなる（矢印C)。

さらに，人口集積が，多様な下位文化の存在を下支えする（Fischer 1975)。都市全体の大規模で高密度な人口は，担う人間の少ないマイナーな下位文化にも，その文化の維持に必要な人員確保を可能にする。そして，多様な下位文化が密集している都市の環境は，異文化との頻繁な接触から自他の区別を常に意識させ，個々の下位文化をよりいっそう明確なものにする（矢印D)。

限られた空間に継続的に人口が流入する都市において，民族文化に代表されるさまざまな下位文化の存在は，文化間の葛藤を引き起こす。移民を制限する法律の制定やクー・クラックス・クランの再興などに代表される排他主義は，こうした社会状況の表れである。地位改善を求める下位文化は，デモやストライキなどの合法的手段だけでなく，人種暴動のように暴力的手段に訴えるかもしれない。また，ある種の逸脱行動を是認する下位文化は，その方法を伝達し

て逸脱者を再生産していく。それぞれの行動は，それなりの理由を持ち，自分たちの下位文化に対しては同調的な行動であっても，支配的な文化からは逸脱行動として認定される（矢印E)。

この図2に，シカゴ学派の理論的関心を重ね合わせてみよう。

都市に流入する人口が，どのような自然地域を形成し，どのような生活や文化を育むかは，パークらの人間生態学における関心である。矢印A・C・Dが形成する三角形が，これらに該当する。人口集積という都市の生態学的特徴から出発して都市に特徴的な生活様式を演繹するワースのアーバニズム論は，矢印B・D・Eが形成する三角形が該当しよう。社会規範の弛緩が逸脱をもたらす矢印Bは，伝統的な第一次集団の衰退を，利己的な行動を統制できない原因とみなすトマスらの社会解体論に該当する。多様な下位文化の存在が逸脱を生み出すという矢印Eは，民族集団間の葛藤などの動態的過程をモデル化したパークの人種関係サイクル論や，逸脱を是認する下位文化との接触が逸脱者を生み出すとするサザランドらの逸脱の文化学習理論が，該当するだろう。そして，こうした理論的関心を実証的に検討する社会調査の方法として，図2上半分のマクロな生態学的過程には，地図の作製や統計分析などの量的調査法が対応し，下半分のミクロな文化的過程には，生活史法や参与観察などの質的調査法が対応する。

最後に，シカゴ学派社会学の特質と当時の社会状況の関係について，若干の考察を行いたい。

シカゴ学派の研究が前提としている社会状況は，これまで見てきたように，大量の移民の流入によって新しく形成された流動的で異質な都市的環境である。そして，シカゴ学派の研究の焦点は，そうした環境で生じるさまざまな逸脱行動であった。

都市を人口の規模・密度・異質性の3点から社会学的に定義したワースは，異質性を定義に加えた理由を「都市人口は再生産されないから，それは他の都市，地方，そして外国から――アメリカ合衆国では最近までそうであった――，

その移住者を補充しなければならない」（Wirth 1938＝1978: 134）と説明している。こうした記述に対して，自然増加が少なくない現代日本の都市に暮らすわれわれは，違和感を覚える。また，ワースのアーバニズム論の流れをくむフィッシャーは，人口の規模と密度の間は論理的な関連があるが，異質性には関連がないとして，異質性を都市的な生活様式をもたらす原因とするよりは，むしろ人口の規模と密度から導き出される結果として扱うべきだとし，異質性を都市の定義に含めることを批判している（Fischer 1972: 192）。しかし，移民が大量に流入していた当時のシカゴの社会状況を考えれば，ワースが異質性を都市の定義に含めたことも理解できる。

シカゴ学派は社会過程を重視した（宝月 1979）と言われるが，毎日新たに到着する移民によってシカゴの街が日々その表情を変えていく様子を目の当たりにしていれば，それも当然であろう。「現実は小説より奇なり」という言葉は，知識が現実に追いついていない様子を示している。当時のシカゴは，まさしくそうした状況であった。シカゴ学派は，「非理論的」という謗りを受けることがある。確かに，後のパーソンズ（Talcott Parsons）のような社会学の体系化には，シカゴ学派は関心を払っていなかった。それは，社会の実証的科学の確立を目指していたシカゴ学派が，まずは，これまで見たこともない社会の現実を捉えることに全精力を集中し，この目的を達成する道具として理論や概念を位置づけていたからであろう。そして，シカゴ学派が好んだモノグラフという研究成果の発表形態は，社会過程の全貌を明らかにし，「今ここ」で生起している現実の把握という点で最適の方法であった。

シカゴ学派が，質的調査法を重視した（Plummer 1983）点も，当時の社会状況と関係すると思われる。多様な下位文化が繁茂する社会状況では，表面的には同じような行動に見えても，まったく異なる意味づけに基づいた行動である可能性が高い。生活史など行動の主観的要素を明らかにする質的調査法は，異文化に暮らす人びとの理解に不可欠な方法であった。パークが，人類学者のように社会を観察することを説いた（Park et al [1925]1967＝1972: 3）のも，

通りが変わるごとに話されている言葉が違うような社会的世界のモザイク的状況があればこそである。

1930年代以降，シカゴ学派のいわゆる「黄金時代」は幕を閉じる。その原因には，一般に，指導的立場にあったパークの引退や他大学の社会学の台頭が挙げられる（Faris 1967＝1990: 177-90)。しかし，その一方で，これまで見てきたシカゴ学派の研究スタイルが前提とする社会状況の変化という側面も指摘できよう。1924年の移民割当法と1929年の大恐慌は，アメリカに渡る移民の数を激減させた。アメリカに到着した移民の数は，1900年代，1910年代，1920年代のそれぞれの10年間は，820万人，635万人，430万人と高い水準で推移したが，1930年代の10年間は，一気に70万人にまで激減する。同様に，シカゴ市の人口も，1900年代，1910年代，1920年代のそれぞれの10年間は，49万人，52万人，67万人ずつ増えていたが，1930年代の10年間の人口増加は，わずか2万人にとどまっている。1930年代に入り，流動的で異質な都市的環境を前提とするシカゴ学派の研究スタイルが，急速にその適用能力を失ったのかもしれない。あるいは，そうしたスタイルに基づく研究成果に，人びとがリアリティを感じられなくなったのかもしれない。もちろん，この点に関しては，大いに議論の余地があろう。

現在の日本は，比較的同質性の高い安定した社会を維持している。しかし，グローバル化という言葉が頻繁に語られ，今後，国境を越えた人びとの交流がますます増えていくだろう。実際，東京の新宿や池袋周辺部など日本の大都市インナーエリアに，外国人集住地区が形成されている（奥田・田嶋 1995)。20世紀初頭のシカゴは，人類が始めて経験した未曾有の流動的で異質な社会であった。それを社会的実験室と称して包括的な実証的研究を行ったシカゴ学派社会学の諸成果は，これからの日本社会のあり方にも重要な示唆を与えてくれると思われる。

参考文献

Allen, Frederick Lewis, 1931, *Only Yesterday: An Informal History of the Nineteen Twenties*, New York: Harper & Brothers Publishers.（＝1993, 藤久ミネ訳 『オンリー・イエスタデイ』ちくま文庫.）

Batchelor, Ray, 1994, *Henry Ford: Mass Production, Modernism and Design*, Manchester: Manchester University Press.（＝1998, 楠井敏朗・大橋陽訳 『フォーディズム――大量生産と20世紀の産業・文化』日本経済評論社.）

Bulmer, Martin, 1984, *The Chicago School of Sociology: Institutionalization, Diversity, and the Rise of Sociological Research*, Chicago: University of Chicago Press.

Burgess, Ernest W., 1924, "The Growth of the City: An Introduction to a Research Project," *Publications of the American Sociological Society* 18: 85-97.

Cavan, Ruth Shonle, 1983, "The Chicago School of Sociology, 1918-1933," *Urban Life* 11(4): 407-20.

Chudacoff, Howard P. and Judith E. Smith, 2000, *The Evolution of American Urban Society*, 5th ed., Upper Saddle River: Prentice-Hall.

Cutler, Irving, 1982, *Chicago: Metropolis of the Mid-Continent*, 3rd ed., Kendall: Hunt Publishing Company.

Donovan, Frances R., 1929, *The Saleslady*, Chicago: University of Chicago Press.

Faris, Robert E. L., 1967, *Chicago Sociology: 1920-1932*, San Francisco: Chandler.（＝1990, 奥田道大・広田康生訳『シカゴ・ソシオロジー1920-1932』ハーベスト社.）

Fischer, Claude S., 1972, "'Urbanism as a Way of Life': A Review and an Agenda," *Sociological Methods and Research* 1(2): 187-242.

Fischer, Claude S., 1975, "Toward a Subcultural Theory of Urbanism," *American Journal of Sociology* 80: 1319-41.（＝1983, 奥田道大・広田康生編訳『都市の理論のために――現代都市社会学の再検討』多賀出版, 50-94.）

Fitzgerald, Francis Scott,（＝1984, 村上春樹訳『マイ・ロスト・シティー』中公文庫.）

Frazier, Edward Franklin, 1932, *The Negro Family in Chicago*, Chicago: University of Chicago Press.

藤澤三佳, 1997, 「社会と個人――その解体と組織化――W・I・トマス, F・ズナニエツキ『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』」宝月誠・中野正大編,『シカゴ社会学の研究――初期モノグラフを読む』恒星社厚生閣, 133-70.

合衆国商務省編（斎藤眞・鳥居泰彦監訳）, 1986, 『アメリカ歴史統計（全3巻）』原書房

Green, Nancy, 1994, *L'Odyssée des Emigrants: Et Ils Peuplèrent L'Amérique*, Pris: Gallimard.（＝1997, 村上伸子訳『多民族の国アメリカ――移民たちの歴史』創元社.）

Gusfield, Joseph R., 1986, *Symbolic Crusade: Status Politics and the American Temperance Movement*, 2nd ed., Urbana: University of Illinois Press.

Harvey, Lee, 1987, *Myths of the Chicago School of Sociology*, Aldershot: Avebury.

Hofstadter, Richard, 1955, *The Age of Reform: From Bryan to F. D. R.*, New York: Vintage Books.（＝1967, 斎藤眞他訳『アメリカ現代史――改革の時代』みすず書房.）

宝月誠, 1979, 「社会過程論としての社会学――トマス, パーク, ミード」 新睦人・大村英昭・宝月誠・中野正大・中野秀一郎『社会学のあゆみ』有斐閣新書, 106-42.

宝月誠, 1990, 「二つの逸脱的な社会生活へのアプローチ――サザランドのモノグラフの解釈」

『逸脱論の研究――レイベリング論から社会的相互作用論へ』恒星社厚生閣, 280-304.
宝月誠・中野正大編, 1997,『シカゴ社会学の研究――初期モノグラフを読む』恒星社厚生閣.
本間長世, 1978,「アメリカ文化史における1920年代――ヴィクトリア文化への挑戦」『アメリカ研究』12: 11-28.
岩野一郎, 1982,「都市政治と移民」阿部斉・有賀弘・本間長世・五十嵐武士編『世紀転換期のアメリカ――伝統と革新』東京大学出版会, 91-128.
川原謙一, 1990,『アメリカ移民法』有斐閣出版サービス.
Kurtz, Lester R., 1984, *Evaluating Chicago Sociology: A Guide to the Literature, with an Annotated Bibliography*, Chicago: University of Chicago Press.
Lipset, Seymour Martin, 1950, "Changing Social Status and Prejudice: The Race Theories of a Pioneering American Sociologist," *Commentary* 9: 475-9.
Lyman, Stanford M., 1990, "The Race Relations Cycle of Robert E. Park," *Civilization: Contents, Discontents, Malcontents, and Other Essays in Social Theory*, Fayetteville: University of Arkansas Press: 127-35.
Lynd, Robert Staughton and Helen Merrell Lynd, 1929, *Middletown: A Study in Contemporary American Culture*, New York: Harcourt, Brace.（＝1990, 中村八郎部分訳『現代社会学大系第9巻――ミドゥルタウン』青木書店.）
Madge, John, 1962, "Peasants and Workers," *The Origins of Scientific Sociology*, Glencoe: Free Press, 52-87.
McKenzie, Roderick D., 1924, "The Ecological Approach to the Study of the Human Community," *American Journal of Sociology* 30: 287-301.
長沼秀世・新川健三郎, 1991,『アメリカ現代史』岩波書店.
中野正大, 2001a,「シカゴ学派とは」『シカゴ学派の総合的研究』1998-2000年度科学研究費補助金研究成果報告書, 京都工芸繊維大学, 1-6.
中野正大, 2001b,「シカゴ・スタイル――シカゴ学派の調査法」『シカゴ学派の総合的研究』1998-2000年度科学研究費補助金研究成果報告書, 京都工芸繊維大学, 7-26.
中野正大・西川知亨, 2002,「シカゴ学派におけるエスニシティ研究（上）――E・フランクリン・フレイジア『シカゴの黒人家族』」『人文』京都工芸繊維大学工芸学部, 50: 13-51.
中野正大・水野英莉, 2001,「初期シカゴ学派における女性研究（上）――フランシス・R・ドノヴァン『セールスレディ』」『人文』京都工芸繊維大学工芸学部, 49: 1-38.
中野正大・水野英莉, 2002,「初期シカゴ学派における女性研究（下）――フランシス・R・ドノヴァン『セールスレディ』」『人文』京都工芸繊維大学工芸学部, 50: 81-123.
Norton, Mary Beth, David M. Katzman, Paul D. Escott, Howard P. Chudacoff, Thomas G. Paterson and William M. Tuttle, Jr., 1994, *A People and a Nation: A History of the United States*, 4th ed., Boston: Houghton Mifflin Company.（＝1996, 本田創造監訳『アメリカの歴史（全6巻）』三省堂.）
岡本勝, 1994,『アメリカ禁酒運動の軌跡――植民地時代から全国禁酒法まで』ミネルヴァ書房.
奥田道大・田嶋淳子編, 1995,『新版・池袋のアジア系外国人――回路を閉じた日本型都市でなく』明石書店.
大下尚一・有賀貞・志邨晃佑・平野孝編, 1989,『史料が語るアメリカ――メイフラワーから包括通商法まで』有斐閣.
Park, Robert E., 1915, "The City: Suggestions for the Investigation of Human Behavior in the Urban Environment," *American Journal of Sociology* 20: 577-612.

Park, Robert E., 1929, "The City as a Social Laboratory," T. V. Smith and Leonard D. White, eds., *Chicago: An Experiment in Social Science Research*, Chicago: University of Chicago Press, 1-19.（＝1986, 町村敬志・好井裕明編訳『実験室としての都市――パーク社会学論文選』御茶の水書房, 11-35.）

Park, Robert E., 1950, "Racial Assimilation in Secondary Groups," *Race and Culture*, Glencoe: Free Press: 204-20.

Park, Robert E., Ernest W. Burgess, and Roderick D. McKenzie, [1925]1967, *The City*, Chicago: University of Chicago Press.（＝1972, 大道安次郎・倉田和四生訳『都市――人間生態学とコミュニティ論』鹿島出版会.）

Plummer, Ken ed., 1997, *The Chicago School: Critical Assessments*, London: Routledge.

Plummer, Ken, 1983, *Documents of Life*, London: George Allen & Unwin.（＝1991, 原田勝弘・河合隆男・下田平裕身監訳『生活記録の社会学――方法としての生活史研究案内』光生館.）

猿谷要, 1976, 「黒人人口の移動とその衝撃」 猿谷要編『総合研究アメリカ第1巻――人口と人種』研究社出版, 103-45.

佐藤哲彦, 1997, 「社会過程としての<ギャング>――フレデリック・M・スラッシャー『ギャング――シカゴにおける一三一三のギャング研究』」 宝月誠・中野正大編,『シカゴ社会学の研究――初期モノグラフを読む』恒星社厚生閣, 251-91.

Shaw, Clifford R. and Henry D. McKay, 1942, *Juvenile Delinquency and Urban Areas: A Study of Rates of Delinquents in Relation to Differential Characteristics of Local Communities in American Cities*, Chicago: University of Chicago Press.

Shaw, Clifford R. and Maurice E. Moore, 1931, *The Natural History of a Delinquent Career*, Chicago: University of Chicago Press.

Shaw, Clifford R., 1930, *The Jack-Roller: A Delinquent Boy's Own Story*, Chicago: University of Chicago Press.（＝1998, 玉井眞理子・池田寛訳『ジャック・ローラー――ある非行少年自身の物語』東洋館出版社.）

Shaw, Clifford R., Harvey Zorbaugh, Henry D. McKay and Leonard S. Cottrell, 1929, *Delinquency Areas: A Study of the Geographic Distribution of School Truants, Juvenile Delinquents, and Adult Offenders in Chicago*, Chicago: University of Chicago Press.

Shaw, Clifford R., Henry D. McKay and James F. McDonald, 1938, *Brothers in Crime*, Chicago: University of Chicago Press.

Sutherland, Edwin H., 1937, *The Professional Thief*, Chicago: University of Chicago Press.（＝1986, 佐藤郁哉訳『詐欺師コンウェル――禁酒法時代のアンダーワールド』新曜社.）

Sutherland, Edwin H., 1947, *Principles of Criminology*, 4th ed., Philadelphia: Lippincott.

Sutherland, Edwin H., 1949, *White Collar Crime*, New York: Dryden Press.（＝1955, 平野竜一・井口浩二訳『ホワイト・カラーの犯罪――独占資本と犯罪』岩波書店.）

高山龍太郎, 2001, 「『ポーランド農民』の家族論」 中野正大編『シカゴ学派の総合的研究』1998-2000年度科学研究費補助金研究成果報告書, 京都工芸繊維大学, 101-15.

Thomas, William I. and Florian Znaniecki, [1918-20]1927, *The Polish Peasant in Europe and America*, New York: Alfred・A・Knopf.（＝1983, 桜井厚部分訳『生活史の社会学――ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』御茶の水書房.）

Thrasher, Frederic M., 1927, *The Gang: A Study of 1313 Gangs in Chicago*, Chicago: University of Chicago Press.

U. S. Census Bureau, 2002, "Selected Historical Decennial Census Population and Housing

Counts," (http://www.census.gov/population/www/censusdata/hiscendata.html, 2002.9.10).
Vold, George B. and Thomas J. Bernard, 1985, *Theoretical Criminology*, 3rd ed., New York: Oxford University Press.（＝1990, 平野龍一・岩井弘融監訳『犯罪学――理論的考察』東京大学出版会.）
Wirth, Louis, 1928, *The Ghetto*, Chicago: University of Chicago Press.（＝1993, 今野敏彦訳『ユダヤ人問題の原型・ゲットー』明石書店.）
Wirth, Louis, 1938, "Urbanism as a Way of Life," *American Journal of Sociology* 44: 1-24.（＝1978, 高橋勇悦訳「生活様式としてのアーバニズム」鈴木広編『都市化の社会学[増補]』誠信書房, 127-47.）
Zorbaugh, Harvey W., 1929, *The Gold Coast and the Slum: A Sociological Study of Chicago's Near North Side*, Chicago: University of Chicago Press.（＝1997, 吉原直樹・桑原司・奥田憲昭・高橋早苗訳『ゴールド・コーストとスラム』ハーベスト社.)